

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008年8月3日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関
職名京都大学大学院教育学研究科
院生(博士課程)

氏 名

家 島 明 彦



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology (ICP2008) 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 8 日 ～ 2008 年 7 月 27 日 ※ICP2008 の前に別の国際 WS と国際会議 (ISSBD2008) に参加したため
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	ドイツ(Germany)・ベルリン(Berlin)・ベルリン国際会議場(ICC Berlin)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	家島明彦 (京都大学大学院教育学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	A Review of Japanese Psychological Studies on Japanese Comics: the first step to materialize 'manga-psychology' (マンガに関する日本の心理学研究の概観と展望: 「マンガ心理学」具体化への第一歩)
補 助 金 額	150,000 円 (内訳: 大会参加費、宿泊費、交通費、ハンドアウト印刷費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

ドイツのベルリン(Berlin, Germany)にあるベルリン国際会議場(ICC Berlin)で開催された、第 29 回国際心理学会議 (XXIX International Congress of Psychology : ICP2008) において、A Review of Japanese Psychological Studies on Japanese Comics: the first step to materialize 'manga psychology' (マンガに関する日本の心理学研究の概観と展望:「マンガ心理学」具体化への第一歩) という題目のポスター発表を(申請通りに)おこなった。また、大会全体を通して世界各国の研究や最前線の研究に触れ、見識を深めた。

【成果】

国際心理学会議への参加は今回が初めてであったが、自分のポスターセッションにおいて世界各国の研究者と活発な議論・意見交換をおこなうことができた。100 部用意したハンドアウトの 90 枚以上がなくなるほど、各国の研究者に関心を持ってもらえたことは大きな成果である。今回の発表テーマ(心理学においてマンガとマンガ読者を扱う試み)に対して世界各国の研究者の多くは「自分の国でも同じように日本のマンガ・アニメは青少年の間で人気がある。とても面白いテーマだ。」という内容のコメントをくれることが多く、国際比較研究(マンガの影響に関する心理学研究を多文化横断的に実施すること)の可能性が開かれた。参加者 7000 人以上と予想されていた大規模学会ならではの国際的交流があり、世界各国(例えば、ノルウェー、インドネシア、ギリシャ、ペルー、台湾、トルコ、エストニア、ウクライナ、ドイツ、アメリカ、など)の研究者が自国における日本のマンガ事情を説明してくれた。ドイツの若手研究者はベルリンにあるマンガ専門店 2 店舗を調べて案内までしてくれたし、台湾の中堅研究者は共同研究も視野に入れた熱心なコメントをしてくれた。他にも多数の研究者たちと連絡先を交換した。これらの研究者との交流(ネットワーク作り)は将来の国際比較研究において重要な礎になると考えられる。

【今後の課題】

今回の発表を聞いてくれた外国の研究者から「引用したいから論文を送ってくれ」と言われることも少なくなかった。しかし、英語で書かれた論文は 1 本もない。今回の国際会議への参加を契機に、今後は英語論文の執筆にも力を注いでいけたらと思う。

【付記】

今回の補助金のおかげで多くのものを得ることができました。この場を借りて御礼申し上げます。また、発表は申請通りにおこないましたが、申請書と報告書で記入事項が異なるところが 2 か所あります。それは旅行期間と補助金額(内訳)です。ICP2008 の前にウィーンと南ドイツで別の国際発表 2 件をおこなったため、旅行期間が延びました。そして、補助金額は申請時の 20 万円ではなく 15 万円でした。そこで、補助金の全額を純粋に ICP2008 に関わる経費にのみ充てた結果、内訳の詳細が申請書と報告書で異なる結果となりました。ご了承ください。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 9 月 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東北大学大学院文学研究科

氏 名 菊地 史倫 印

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The XXIX International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum Berlin (ドイツ、ベルリン、ベルリン国際会議センター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	菊地史倫・佐藤拓・阿部恒之・仁平義明 (東北大学大学院文学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The effects of the deception as a result of varying contents concerning the possibility of occurrence on ratings of truthfulness and forgiveness (出来事の生起確率が異なるウソが真実性とゆるしの評価に及ぼす影響)
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 旅費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

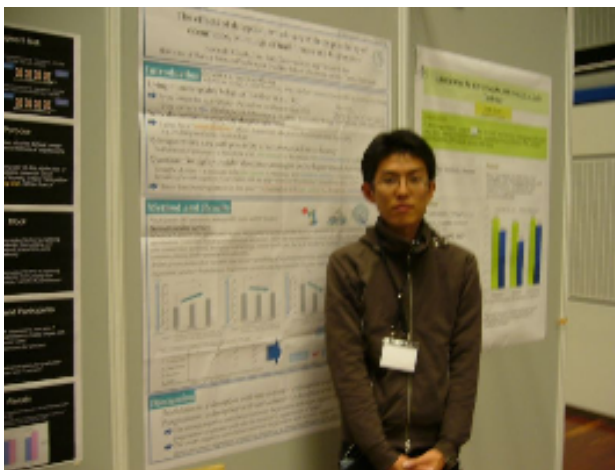
国際会議等参加報告書

日本心理学会の国際会議等参加旅費補助金を受けることで、2008年7月20日から25日にかけて開催された第29回国際心理学会議に参加することができた。今回参加した国際会議は、私にとって初めての国際学会であり、大変有意義な経験となった。本会議は4年に一度開催される国際会議であり、100ヶ国以上の研究者が9000件以上の研究発表を5日間で行う旨が、20日のレセプションパーティーで報告されたときには、その規模の大きさに驚かされた。またレセプションパーティーではドイツが世界に誇るベルリンフィルハーモニー管弦楽団による演奏、ヒップホップダンスやBMXバイクによる演技が催され、日本の学会とは違う雰囲気を楽しむことができた。

私の発表は21日の午後のポスター・セッション（14時から17時）であった。初めての国際学会、英語発表であったため非常に緊張していたが、午前中のポスター・セッションに参加し会場の雰囲気に慣れることができた。規模の大きさからかなりの発表件数だと想像していたものの、1セッションで400件程度のポスター発表が行われていることには驚いた。ポスターの内容も国際色豊かで、日本の学会よりも色鮮やかなポスターが多い印象を受けた。

国際学会で発表を行うにあたって、午前中のポスター・セッションのいくつかの発表を聞き、拙い英語でも質問をかわすことができたことは非常に得がたい経験であった。また、この経験が自分自身の発表に対する準備となった。しかし実際に、自分の発表の時間になると日本の学会では経験のしたことのない緊張感を禁じえなかった。英語力にはさほど自信がないとはいえ、いざとなったら発表原稿を暗記すればよいだろうという甘い考えで望んだが、実際には質疑応答という難関があった。質問自体は理解できるのだが、回答を英語で表現することに四苦八苦した。質問者との身振りを交えたコミュニケーションの中で、なんとか自分の伝えたいことを伝えることができたと思うが、研究の内容を伝えるだけでなく、相手と議論を深めるためには、最低でも日常会話をこなせる程度の英語力が必要であることを痛烈に実感させられた。

21日以降もポスター・口頭発表やシンポジウムに参加することで様々な分野の最新の知見について知る機会が得られたと思う。今回初めて国際学会に参加することで、いくつか実感させられることがあった。まず日本における学会参加も重要なことであるが、最新の研究動向について知るには国際学会に積極的に参加していくべきだと実感させられた。そして、言いたいことを伝えるには拙い英語力でもなんとかかなるが、議論を深めるためには英語力を一層向上させる必要性を実感させられた。このような実感は、国際学会に参加し、実際に英語を母語とする人たちと質疑応答をしないと得られないものである。今後、積極的に国際学会などに参加することで英語によるコミュニケーションの機会を逃さず、英語力の向上はもちろん、研究内容を向上させていきたい。



国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 9 月 13 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 九州大学人文科学府 大学院生

氏 名 翟 勇

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	www.icp2008.org
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	International Congress Centrum ICC Berlin, Germany ドイツ・ベルリン・国際会議センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	翟 勇 九州大学人文科学府 坂本 勉 九州大学人文科学研究院
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Consideration on the shift of sentence processing strategies 文処理方略転換についての考察
補 助 金 額	150,000 円

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

XXIX International Congress of Psychology に参加するための補助金をいただき、本当に感謝の気持ちいっぱいです。たいへん助かりました。ありがとうございます！

発表は学会 1 日目の午前中で、研究内容についてたくさん貴重なコメントをいただきました。これからの研究に非常に役に立ちます。特に、静岡大学の二人の先生方に「自然言語理解」の視点からモデルを作ればもっと面白くなると言われて、各分野との関連について新しい道を導いていただきました。

また、今回の学会を通じて、たくさんの友達を作りました。北京大学心理学研究室の葉博士・張博士、中国科学院心理学研究所の李博士、北京師範大学管理学院の李教授、東京大学大学院の温さん、恵泉女学園大学の斉藤先生、台湾輔仁大学の陳先生、お互いの研究を紹介し、たいへんいい勉強になりました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 13 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
東北大学大学院国際文化研究科研究員
氏 名 松田 幸久 印

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology (第29回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 18 日 ～ 2008 年 7 月 30 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	International Congress Centrum, Berlin, Germany (ドイツ、ベルリン、国際会議センター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松田 幸久 所属：東北大学大学院情報科学研究科所属
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Attentional capture does not cause inhibition of return. (注意の捕捉は復帰の抑制の生起原因ではない)
補 助 金 額	150,000 円(内訳 全渡航費 16 万円および宿泊費 4 万円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

私、松田 幸久は XXIX International Congress of Psychology（第 29 回国際心理学会議）に参加し、発表を行う目的において 2008 年 7 月 18 日から 7 月 30 日までの計 12 日間の旅行を行った。

出発前にロンドンにある Imperial College London にある研究室に訪問し学術交流を行う旨の希望を申請したところ許可がおりたため、旅程は申請時の帰国日（27 日）から 3 日間延長したものとなった。延長の理由は、申請時には相手の研究室の予定が不明であり訪問可能日程に幅をもたせ確実に訪問できるように配慮したためである。

参加学会において私は予定していた発表を行い世界各国の研究者と深く議論を交わした。また、開催中にひらかれた招待講演などに積極的に参加し、専門分野における新たな視点、知識について学習した。

国際学会が終了した次の日にロンドンへ移動した。研究室に訪問し、とくに眼球運動と復帰の抑制、および能動的制御能力との関係について 深く議論を交わした。

今回の旅行の日程は次のようであった。

7 月 18 日： 仙台～成田、成田～バンコク、バンコク～フランクフルト、フランクフルト～ベルリン（現地時間 19 日着）

7 月 26 日： ベルリン～ロンドン（現地時間同日着）

7 月 30 日： ロンドン～バンコク、バンコク～成田、成田～仙台（現地時間 8 月 1 日着）

以上

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 30 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋文理大学短期大学部・助教

氏 名 山 本 ち か ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The XXIX International Congress of Psychology ICP 2008
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日 (申請時は 18 日出発であったが 19 日出発に変更になった)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum ICC Berlin (ドイツ, ベルリン, ベルリン国際会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	山本ちか (名古屋文理大学短期大学部), 氏家達夫 (名古屋大学), 二宮克美 (愛知学院大学), 五十嵐敦 (福島大学), 井上裕光 (千葉県立衛生短期大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Longitudinal development of global self-worth and school adjustments during early adolescence in Japan 日本における初期青年期の全体的自己価値と学校適応の縦断的变化
補 助 金 額	100,000 円

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

The XXIX International Congress of Psychology ICP 2008（国際心理学会 2008）は、2008 年 7 月 20 日から 25 日にかけて、ドイツのベルリンにある International Congress Centrum ICC Berlin にて開催された。日本では大変暑い時期であったが、ドイツの気候は 20℃を下回る日もあり涼しく快適な気候であった。6 日間の会期の間には、数多くのシンポジウム、講演、口頭発表やポスター発表が行われていた。

今回の国際心理学会は、8600 名を超える参加者があり、シンポジウムの数が 470 件ほど、ポスター発表は 4180 件、口頭発表は 4400 件もあった。このような大規模な国際学会に参加するのは初めてであった。

日本からの参加者が大変多く 400 名ほど参加していたそうである。ポスター発表会場などでも日本の研究者の発表し、各国の研究者と議論をしている場面を数多くみかけた。日本の研究者が国際的な場で活躍しているということを感じることができた。

また、これまで国際学会は、ISSBD（International Society for the Study of Behavioural Development）、SRA（Society for Research on Adolescence）など、自身に関心のあるごく限られた領域（発達や青年期）での学会に参加しただけであった。国際心理学会は、研究の他領域に渡っており、心理学の様々な領域の最新の研究に触れることができ有意義であった。

発表については、今回は「Longitudinal development of global self-worth and school adjustments during early adolescence in Japan（日本における初期青年期の全体的自己価値と学校適応の縦断的变化）」というタイトルでポスター発表を行った。発表した研究の概要は以下に示す。

研究の目的は、初期青年期（中学生）の間、全体的自己価値と学校適応の縦断的な発達的变化について、成長曲線モデルを用いて検討することであった。具体的には、全体的自己価値と学校適応にどのような変化がみられるのか、全体的自己価値と学校適応の変化の仕方がみられるのか、学校適応の変化は全体的自己価値の変化に影響するのかを検討した。調査協力者は中学生 449 名、調査は中学 1 年 2 学期、中学 2 年 2 学期、中学 3 年 2 学期の 3 回実施した。

主要な結果は以下の通りであった。(1)中学校の 2 年間の間に全体的自己価値と学校適応の得点は低下していた。(2)全体的自己価値と学校適応の得点には性差がみられたが、変化の仕方に違いはみられなかった。(3)学校適応の側面の中の「クラスへの満足感」が全体的自己価値に影響していた。しかし「クラブ活動」「先生との関係」「勉強」については、全体的自己価値に直接は影響しておらず、「クラスへの満足感」を介して間接的に影響していた。

ポスター発表の時間は 9:00 から 12:00 までの 3 時間であったが、その間に多くの研究者と議論ができた。日本人の研究者は勿論であるが、ドイツ、他のヨーロッパの国々、中国、アフリカなど海外で、中学生や自己価値感・自尊感情に興味をもち研究している研究者の意見を聞くことができた。特に、中学生への縦断的研究であるという点、質問紙法を用いて大規模な調査を行っているという点、成長曲線モデルを用いて分析を行っているという点が、質問していただいた多くの研究者にとって興味深かったようである。質問していただいた方からは、他の国の中学生の現状についても話も聞くこともでき、たいへん有意義であった。

最後に、この学会への参加に助成していただいた日本心理学会、学会関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 9 月 8 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 関西学院大学大学院 文学研究科
博士課程前期課程 2 年
氏 名 沼田 恵太郎 (印)

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	X X IX International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日 (航空券予約のため、2008 年 7 月 18 日～2008 年 7 月 26 日から変更)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum (ドイツ, ベルリン, 国際会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	1. 沼田 恵太郎 (関西学院大学大学院 文学研究科) 2. 嶋崎 恒雄 (関西学院大学 文学部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Second-order retrospective revaluation in human contingency learning (ヒトの随伴性学習における 2 次の回顧的再価値化の実験的検討)
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 航空券代金として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

「ICP への参加を終えて」

関西学院大学大学院文学研究科 博士課程前期課程 2 年 沼田恵太郎

今年 7 月 20 日から 25 日にかけてベルリンで開催された ICP に参加して参りました。初学会発表、初国際学会と何もかもが初めての体験でしたが、それ故に“驚き”も多く、実りのある時間を過ごすことができたように思います。

最初に驚いたのは、ウェブ上で大会プログラムを目にしたときでした。今大会の発表数は合計で 8600 を超えており、改めて ICP の規模の大きさを感じることができました。しかし、その反面、膨大なプログラムの中から自身が参加するセッションを選択することは容易ではなく、出国前日はセッションへの参加をいかに最適に行うかということの思案に明け暮れていました。私が見たいのは学習心理学や思考心理学に関わる発表なのですが、それらが時間的に重なってしまう場合も多々あり、結果的には自分の分野により近いものだけを選択せざるを得ませんでした。この点についてはいささか残念な思いをしたのですが、それだけ ICP のプログラムが充実していた証拠なのだと思います。以下に、私が参加したセッションを一部ですが簡単にご紹介します。

初日は、York Hagmayer 先生が主催された“Causal judgments under uncertainly condition”という 2 部構成のシンポジウムに参加しました。Marc Buehner 先生、York Hagmayer 先生、David Lagnado 先生、Magda Osman 先生をはじめとする、総勢 11 名の研究者の方々が様々な視点から、不確実状況における因果判断について議論を繰り広げていました。どの発表者も非常に発表が上手で、思わず引き込まれてしまうほど興味深いお話でした。

2 日目以降のセッションで特に印象に残っているのは、Jan De Houwer 先生の“Potential pitfalls in the study of associative learning of implicit attitudes”という発表です。ものすごい数の立ち見が出るほどの大盛況で、また会場では笑いが何度も起きるほど楽しいお話でした。具体的には刺激と反応の間にある連合を「宝物」になぞらえて、たくさんの例を挙げながら、連合学習研究における記述の重要性についてお話しをされていました。また、David Shanks 先生が主催された“Computational models of decision making”のシンポジウムも大盛況で、意思決定の最新の理論についての紹介とそれに対する議論の応酬がとても印象的でした。どの発表もとても魅力的で、同時にまだまだ勉強すべきことが山積みだと実感し、今後の研究への活力が湧いてきました。

私のポスター発表は、2 日目の午前に行わせていただきました。発表タイトルは、“Second-order retrospective revaluation in human contingency learning”というもので、その内容は、回顧的再価値化と呼ばれる「過去をふり返る推論」が連鎖的に生じるか否かを実験的に検討したものでした。ヒトの随伴性学習の研究は国内ではあまり見受けられないのですが、ICP では想像以上に多くの研究が発表されており、ここでもまた“驚き”がありました。また、発表中は Helena Matute 先生や Miguel Vadillo 先生など、ヒトの随伴性学習の研究をされている先生方が何名か発表を聞きにきてくださり、つたない英語ではありましたが何とか発表を終えることができました。先生方とお話した際は、出国前夜に印刷した先生方のプロフィールや、ポケットの中のデジタルカメラが活躍してくれたことも手伝って、非常に楽しい時間を過ごすことができました。発表の際に先生方からいただいたご意見や、ポスター発表中に会った他の発表者との議論からは、今後の研究を進めていく上での素晴らしい示唆を得ることができました。

そして最後になりましたが、このたびの日本心理学会からの助成に心より感謝の意を表します。このように貴重で有意義な体験ができたことは、私にとってかけがえの財産となりました。ICP への参加に必要な費用は、学生の私にとって決して小さなものではなく、日本心理学会からの助成は、金銭的な負担や心理的な負担を大きく減じてくれるものでした。本当にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 20 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 長野県看護大学・講師

氏 名 松本 じゅん子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 29th International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 18 日 ～ 2008 年 7 月 27 日 (国内の空港で前泊の必要があったため、出発日が 7/19 から 7/18 に変更となった)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum ICC Berlin (ドイツ, ベルリン, ベルリン国際会議センター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松本 じゅん子 (長野県看護大学看護学部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	A preliminary study for the construction of a musical mood scale: Structure of moods induced by music (音楽感情尺度作成の予備的研究—音楽により引き起こされる感情の構造—)
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 国外旅費: 100,000 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

ベルリンで開催された第 29 回国際心理学会議 (ICP) に参加した。国際心理学会議はもとより、心理学関連の国際会議には初めての参加であった。参加者は、登録者だけでも 8,600 人以上であり、口頭発表及びポスター発表はそれぞれ 4,000 件以上、シンポジウム等も 400 件を越え、自分の予想を遙かに超える大規模な会議であることに参加前から驚いた。

今回、私はポスター発表を行った。発表は 4 日目の午前中であり、音楽聴取によって生じる聴き手の気分・感情を測定する項目を作成するための調査の発表を行った。各ポスターセッションの時間は 3 時間も設けられていたが、日本国内の学会とは異なり、在席時間は特に設けられているわけではなく、非常にゆるやかなものを感じられた。また、ポスターの前に発表者がいるところもあれば、いないところもある上、ポスター自体貼られていないところも多く、国内ではそう見ることのできない光景を、ある意味とても興味深く感じた。

とりあえずポスターの前にいると、研究内容に対して様々なコメントや質問をもらった。方法に関する質問・コメントが多く、質問紙による調査だけではなく、実験的な方法も取り入れて検討することを考えさせられた。発表そのものについても、今後もう少しわかりやすく方法や結果を示そうと反省した。また、近くのポスターの前に何となく見覚えのある発表者がいたため、尋ねて行くと、以前ソウルで行われた学会で話したことのある中国の研究者の方であり、再会に驚いた。翌月に札幌で行われる国際学会にまたお互い参加するということで、互いの研究内容の説明や意見交換に加え、連絡先を交換したり、写真を撮りあったりした。口頭発表も含め、全体として音楽に関する発表は多くはなかったものの、音楽を専門とする参加者の意見も聞くことができ、交流のよい機会となった。

本会議では、ワークショップへの参加も試みた。ワークショップは 1 日目に催され、Dr. Spielberger 氏による "Measuring emotional states and personality traits, anxiety, anger, depression and curiosity" に参加した。国際会議でのワークショップへの参加は初めてであり、また、事前に概要が知らされていなかったため、やや不安を感じたまま会場へ入った。椅子は殆ど埋まっていたが、日本からの参加者は少なそうであった。参加者の自己紹介が最初に行われ、日本での (有料の) ワークショップとはかなり雰囲気が違うように感じられた。ワークショップの主な内容は、不安、怒り、抑うつ、好奇心について、順に各感情の説明が丁寧に行われ、それらの特性としての感情及び状態としての感情をそれぞれ測定する尺度が紹介された。その間も参加者からは、質問や意見が飛び交っていた。個人的には、比較的取り上げられることが多い不安や抑うつ等の感情についてそれぞれ確認を行うことができ、実用的な尺度の情報を得ることができたと感じた。

今回残念だったのは、Zimbardo の講演を聞くことができなかったことであった。一回目の講演は自分の発表時間と重なり、予定外に実施された二回目の講演は定員オーバーで会場に入ることでもできなかった。やはり世界的に有名な研究者の講演ともなると、そう簡単には聞くことができないのだなあとも思ったが、今後、プログラムや会場での情報をよくチェックしておかないといけないと反省した。他には、本会議で催されていた Controversial Debates などは大変おもしろい試みに思えた。その一つの "Do chimpanzees have culture?" に参加したが、壇上の発表者だけでなく、フロアからの質問や意見も大変活発であり、議論が尽きないように思われた。

以上、本会議に参加し、自分の研究を発表できたことや、各国で行われている最近の研究や話題を直接知ることができたことは、大変有意義であった。今後も研究を積み重ねていかなければと強く感じ、4 年後の ICP でも発表できるよう頑張ろうと思った。

最後になりましたが、旅費を補助していただきまして、心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 6 月 18 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
東海学園大学人文学部・非常勤講師
氏 名 前田洋枝

㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	II International Conference on Community Psychology 第 2 回国際コミュニティ心理学会大会
公式ホームページ URL	http://www.2iccp.com/index.html
開 催 期 間	2008 年 6 月 4 日 ～ 2008 年 6 月 6 日
旅 行 期 間	2008 年 6 月 3 日 ～ 2008 年 6 月 9 日 (申請書では旅行期間を 2008 年 6 月 8 日までとしていましたが、6 月 7 日に現地発・6 月 8 日日本着の飛行機が取れず、発表日が 6 日のため、帰国日を早めることもできなかったため、滞在を 1 日延長し、6 月 8 日に現地発・6 月 9 日日本着の飛行機とした。)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Portugal, Lisboa, Fundação Calouste Gulbenkian (ポルトガル ・ リスボン ・ カルースト・グルベキアン財団)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	前田洋枝(東海学園大学人文学部) 広瀬幸雄(名古屋大学大学院環境学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Empowerment as the determinants of citizen participation for environmental management plan(環境計画への市民参加の規定因としてのエンパワーメント)
申 請 金 額	150000 円 (内訳 国際航空券代 148000 円および空港施設使用料 2500 円および 海外諸税 43820 円の一部とした。)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2008年6月4日から6月6日まで、リスボン(ポルトガル)の カルースト・グルベキアン財団で開催された II International Conference on Community Psychology (第2回国際コミュニティ心理学会大会)に参加し、口頭発表により研究発表を行なった。

申請者(東海学園大学(非常勤講師)・前田洋枝)の研究発表は、Empowerment as the determinants of citizen-participation for environmental management plan(環境計画への市民参加の規定因としてのエンパワーメント)という題目であり、名古屋大学大学院環境学研究科の広瀬幸雄教授との連名として行なった。内容は、津島市の市民参加によるごみ処理基本計画作り・環境計画作りを事例とし、先行して市民参加により策定が完了していたごみ処理基本計画に対する評価と調査実施時に市民参加による策定が開始されていた環境基本計画への参加意図の規定因を、無作為抽出の津島市民を対象として調査を行なったものである。調査回答者のうち、市民参加の経験のない市民のデータを分析した結果を報告した。結果の概要は、市民参加によるごみ処理基本計画づくりの評価の規定因は市民参加で策定された計画の社会的効果と市民参加で策定することの非効率性の評価といった社会的要因が主に影響しているのに対して、調査実施当時に市民参加により策定中であった環境基本計画作りへの参加意図は、参加することで期待されるエンパワーメントが主に影響しているというものであった。先行して策定されたごみ処理基本計画に対する総合評価は、環境基本計画への参加意図に有意な影響を及ぼしていなかった。

本研究発表は大会3日目の午前中であったが、申請者が第2著者、本研究の第2著者が発表者となって大会1日目の午前中に発表したボランティア経験者を対象に市民参加による計画作りへの参加意図を他地域で調査した事例も関連する内容であった。このため、1日目の連名発表者による発表を聴いていた参加者が本研究の発表にも訪れるなど、本研究の発表は、主会場とは別の建物が当該セッションの会場であったにもかかわらず、多くの参加者が聴衆としてセッションに参加し、申請者によるプレゼン後の質疑では、活発に質問やコメントを受けた。他の参加者からの質問・コメントでは、本研究では参加意図を測定して従属変数としていたが、実際の行動(計画策定の市民参加プロジェクトへの参加の有無)を測定しなかったのはなぜか、という点や、本研究で測定したエンパワーメント期待や個人的コストの測定内容が主に議論となった。総じて、実際の市民参加の事例に対して実証的な研究を行なった本研究に対する国際コミュニティ学会の参加者の関心は高かったと考えられる。

なお、申請者にとって国際コミュニティ心理学会への参加は初めてであったが、今回の参加を通して、コミュニティ心理学の最新の研究関心を知ることができた。申請者の研究関心領域である市民参加やエンパワーメントについても、コミュニティにおけるエンパワーメントに関する講演や研究発表のセッションが複数組まれているなど、多くの研究発表に触れることができた。この度の国際学会参加旅費補助を受けることができたことに対して深く感謝いたします。

国際会議等参加旅費補助金報告書

07016

2008 年 8 月 4 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

中央大学 研究開発機構 専任研究員
氏 名 高 島 翠



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 2008 国際心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany / Berlin / The Internationales Congress Centrum ICC Berlin (ドイツ ベルリン ベルリン国際会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	高島翠 (日本大学) 藤井輝男 (敬愛大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Figure・ground organization on Watercolor effect and Sumi painting effect (水彩効果・墨絵効果における図地の成立について)
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 成田～ベルリンまでの航空運賃の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

国際会議等参加旅費補助金を利用し、7月20日から25日までベルリンで行われていた ICP (International Congress of Psychology 2008) に参加した。参加者は8千人を超え、世界各国から心理学者が集まり、最先端の研究発表が行われた。

報告者は、近年報告された比較的新しい色の拡散効果である水彩効果および墨絵効果の図と地の成立に関する研究発表をポスターセッションで行った。

水彩効果を最初に報告した Pinna らの研究グループによると、水彩効果の生じる領域は古典的なゲシュタルト要因よりも図になりやすさを誘導することが強調されている。図の特徴について再考してみると、図の領域は地の領域よりも手前にあり、地の領域とは異なり、輪郭線が属してかたちをもつ。

そこで本発表では、無彩色の水彩効果の生じるパターン、墨絵効果の生じるパターン、拡散効果の生じないパターンを用意し、近接の要因、同じ幅の要因と相乗あるいは拮抗するパターンを作成した。それぞれのパターンにおいて、奥行き成立とかたちの成立のふたつに分けて、図と地の成立について検討することとした。

その結果、水彩効果の生じるパターンと拡散効果の生じないパターンとに大きな違いはなく、拡散効果と図と地の成立とは直接的な関係がないことが示唆された。すべての観察者から、水彩効果の生じる領域は手前になることが報告されたが、同じ幅の要因においては、水彩効果の生じる領域がかたちとして成立するという観察者と、同じ幅の領域がかたちとして成立するという観察者とに分かれた。このことから、正確に述べるならば水彩効果は奥行きの成立を促すものであり、図と地の成立に関しては古典的要因よりも強いとは言いきれないことが示唆された。また、墨絵効果においては、すべての観察者から奥行きの反転が報告され、同じ幅の領域がかたちとして成立することが示された。つまり、墨絵効果は一定の図と地の成立を促すものではないことが明らかとなった。

この研究についてポスターセッションで発表を行い、国内外の研究者からアドバイスをいただき、有益な情報交換を行った。

*なお、申請時には渡航期間が2008年7月18日～2008年7月25日、申請金額の内訳が「成田～フランクフルトまでの航空運賃の一部」となっておりましたが、飛行機を取ることができなかったために、渡航期間が2008年7月19日～2008年7月27日、内訳が「成田～ベルリンまでの航空運賃の一部」に変更となりました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 1 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学人間科学研究科博士前期課程 2 年

氏 名

宮本 匠 

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 第 29 回 世界心理学会会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum (ドイツ、ベルリン、国際会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	宮本匠 (大阪大学大学院人間科学研究科) 渥美公秀 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Creative processes of community revitalization from narrative approach: A case study from Chuetsu earthquake (ナラティブ・アプローチによる創造的な地域復興の過程について：中越地震からの事例研究)
補 助 金 額	150000 円 (内訳 航空券費用 240000 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

第29回 世界心理学会議に参加させていただいた。私は主に災害に関わる研究発表、そしてアクションリサーチやエスノグラフィーを手法として用いているものを中心に見た。災害に関わるものについては、一篇のすばらしい発表「Disaster and trauma: Who suffers and who recovers from trauma, and how? Damodar Suar, Kharagpur, India <Invited Symposium>」に触れることができた。これは、2004年のスマトラ沖地震による津波の被災地における調査をもとに、災害後のPTSDと心理学者の役割を議論している。興味深い点は、PTSDの議論を被災者個人ではなく、ひろく社会的な背景において捉えている点である。深刻な被害を受ける被災者の災害に対する脆弱性が深刻な被害を生み、それがPTSDを引き起こすことにつながっている。そのため、PTSDに何らかの対処を試みようとするのなら、心理学者は単にPTSDを被った人のカウンセリングだけにとどまらず、災害サイクルに応じてひろくコミュニティのエンパワメントにまで視野を拡げて対応しなければならないのだという内容である。多くのPTSDを扱う研究は、いかにその症状を治療するのか、あるいはPTSDに関わる様々な傾向を分析しているが、今回の発表のような「そもそもPTSDになってしまうような被災を受ける人を減らそう」という姿勢に、共感しながら、自分の研究がどれだけその姿勢に向き合っているのだろうかと考えさせられた。

次に興味深かったセッションは、「Why psychology moves toward Qualitative?: Epistemological Foundation Chairman: Gunter May & Jaan Valsiner」で、Valsinerのものが興味深かった。彼は、質的な心理学への移行について、そもそも量的なアプローチをとる研究者らが用いる「客観性」も非常に疑わしいものなのだとすることを主張し、質的心理学を進めていく上での一つ概念として、「ゲシュタルトレベル」なる概念を提案していた。メキシコ人のCesarの発表は、非アメリカヨーロッパ的な心理学についてのもので、ラテンアメリカ、日本、インドの心理学史を近代化という観点も交えて総括していくという壮大なものであった。オーストラリアのSullivanの発表は、言語の再帰性をヴィトゲンシュタインの言語ゲームの概念から説明し、その質的心理学への応用を議論していた。

その他ポスター発表を全体的に見れば、脳科学系がかなり多いように感じた。連日、ポスターの5分の1ほどは脳科学系である。ナラティブについてさえ脳科学から論じられるものもあった。こうした動向に対して、質的心理学を志向する立場からどのように議論をすることが出来るのか、明確な言葉を持たなければならぬと感じた。

また、ドイツ人の女性による研究で、近年公開されたヒトラーの自伝をもとに、ヒトラーの人格を分析、その結果、ヒトラーは本当はホロコーストなんて引き起こす意図はなかったという内容の発表に「ドイツ人は、未だにナチス・ドイツを肯定しているのか」と反論があり、それに対して発表者から「私はそんなことを言っているのではない、これはあくまで研究発表であり、データなのだ」と、さらに反論があった。この例は、研究が価値志向をもつこと、言い換えれば、そもそも研究という営みも必然的に何らかの価値を帯びた社会的実践に他ならないということを考えたときに、それを自覚しない研究がもつ危うさを物語っているのではないかと思う。未だ苦しみながら経験を語るSurvivorsの存在を前にして、あるいは間接的なSurvivorsの存在を前にして、このような研究を行うことのやはり倫理を問いたい。研究と倫理の問題はそもそもこうした点から根本的に議論される必要のある類のものではないだろうか。

最後に、自身の研究発表について報告する。今回の発表は、新潟県中越地震の被災者に、その復興過程について、曲線を用いたインタビューによって調査し、考察したものであったが、非常に多くの方から大変素晴らしいコメントを頂いた。特に、自分と同じような研究を行っている海外の方々(災害研究、フィールドワークを手法として用いているもの、アクションリサーチを志向するもの)と、多く出会えたことは、今後の研究についても大変有意義なものになるように思われる。

今回はこのような貴重な機会を頂き大変ありがとうございました。
心より御礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 6 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院 3年制博士課程
 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 1年次
 氏 名 設楽 紗英子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX INTERNATIONAL CONGRESS OF PSYCHOLOGY 国際心理学会議
公式ホームページ URL	www.icp2008.org
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 14 日 ～ 2008 年 7 月 27 日 ※申請書の日程では飛行機が予約できず、期間が予定より長くなりました。
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	ICC Berlin, Germany ICC ベルリン、ドイツ
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	設楽 紗英子 (筑波大学大学院 人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Work engagement and communication process at workplace in Japan 日本におけるワーク・エンゲイジメントと職場のコミュニケーション・プロセス
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 参加費 ¥16,538 (100Euro) 飛行機代 ¥134,840)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

ICP に参加するにあたり、旅費補助をいただき、誠にありがとうございました。以下をご報告いたします。

◎発表について： ポスター内容は、Work engagement (Schaufeli, et al., 2003) が高い個人は日ごろどのように職場の対人関係をとっているのか、ということに関して、面接調査を行い、M-GTAを参考に分析・検討したものである。その結果からは、個人の仕事目標を遂行するための対人関係の取り方と、職場の対人関係の調整・調和を図った対人関係の取り方と、大きく 2 つの側面を対人関係に関して持っていることが指摘された。特に、人との関わりを求めている点、相手の情緒的な面に留意している点が特徴的と考えられた。

このポスターに対し、手法や結果の点で興味深い、というコメントを得ることができ、用意した配布物もだいぶなくなった。しかし、他国の研究者の目には自分の研究はどのように映るのか興味深く、ほとんどの時間をポスターの前で待機していたが、直接コメントをかわした人が少なかったのは残念なことだった。発表日が学会最終日ということもあったのだろう。会場はどことなく人が少なく感じられ、足を止めてまでみていく人は（私のポスターに限らず）前日までよりも少ないようだった。

ポスター発表の反省点として、ポスターのレイアウトがある。問題と目的から丁寧に書いたため、研究の背景から結果に至るまでの流れは分かりやすかったものの、実際に掲示されたポスターは少々見づらいものだった。今回発表した研究結果は視覚的に訴えるように図示した方がわかりやすいと考え、そのように結果をレイアウトするつもりだったが、実際に会場で掲示してみると、予想とは違った。原因としては、パワーポイントで作成したスライドの一枚一枚をプリントアウトしたものを組み合わせてはる方法を取ったため、図がぼんやりしてしまったためと思われる。A0 サイズのもので一枚にレイアウトした方が今回は見やすかっただろう。今後、ポスター発表の際の課題としたい。

◎聴講したシンポジウムなど： 研究発表は、産業・組織分野に的を絞って見て行った。いくつか聴講したシンポジウムのうちでも、特に勉強になったのが、“Values, community, engagement and burnout: International perspectives” である。私の研究領域に関するテーマであっただけでなく、Maslach と Leiter という、burnout の第一人者のプレゼンテーションを目にする機会に恵まれた。発表内容から得たこととしては主に 2 点。まず、burnout について復習することができたということ。Burnout は、他者から適正な評価を得られない（もしくは感じ取ることができない）というところがミソなようである。次に、Maslach ら burnout 研究の最前線では、職場における価値観の一致の重要性に目を向けているということ。Maslach らは 2 つのプロセスを burnout の緩衝効果としてあげており、価値観の一致はその一つである。同じような価値観の共有が、burnout の緩衝要因になるという。仕事に限らず、誰かと働いていれば、価値観、物の見方や考え方が違えば違うほどうまくいかないだろうことは日常的に誰もが経験していることだろう。それが研究レベルでも大きく取り上げられるようになった点には意義がある。ただ、その他のパネリストの発表も含め、産業心理学的に、また理論的に、就労者に影響を与えるとされる外的要因の力動を取り上げている場合が多い。働くという文脈上のものであること、burnout 自体が対人援助職の中から発見された対人関係色の濃いものであること、などが原因と思われるが、burnout を取り上げることで分かる何か、に欠けているようにも感じられた。

その他、ポスター発表には、シンポジウムではあまり見られないような独創的な研究がいくつか見られた。全体的に、当日貼られていないポスター掲示板が目につき、シンポジウムなどと比べると人が少ないようにも感じられた点は、日本の学会とは異なる点だろう。しかし、発表者と時間をあまり気にせず活発に情報交換ができる点は同様であり、各国の特に若手研究者の意見などを聞いた点は、今回初めての国際学会参加だった分、貴重な経験だった。大学院生のうちからこのように海外の研究者と接する機会を持てたことに感謝する学会参加だった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 7 月 31 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 京都大学大学院教育学研究科・院生

氏 名 野村光江



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 12th European Conference on Facial Expression 第 12 回ヨーロッパ表情学会
公式ホームページ URL	http://affectco.unige.ch/FACS-Congress-2008
開 催 期 間	2008 年 7 月 28 日 ～ 2008 年 7 月 31 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 28 日 ～ 2008 年 7 月 31 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Switzerland・Geneva・Faculty of Psychology and Educational Sciences of the University of Geneva スイス・ジュネーブ・ジュネーブ大学心理教育科学学部
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	野村光江 (京都大学大学院教育学研究科)・ 吉川左紀子(京都大学こころの未来研究センター)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes 感情エピソードを語るときの視線・表情
補 助 金 額	150000 円 (内訳 航空券代)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

まずはじめに、日本心理学会の国際会議派遣助成により第 12 回ヨーロッパ表情学会 (The 12th European Conference on Facial Expression)に参加させていただきましたこと、ご関係の方々に厚く御礼申し上げます。

本学会には、顔の動きの分析についての研究や応用における、最新の成果について議論するために世界中から研究者が集まります。日本からは、今回 4 名の参加がありました。表情認知に比べて表情表出を研究する研究者の数は多くないせいか、学会の規模はそう大きくありません。4 日間の学会期間中に、口頭発表が 41 件。ポスター発表が 23 件あり、どの発表においてもうち解けた雰囲気議論が行われている印象を受けました。筆者は「Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes (感情エピソードを語るときの視線・表情)」と題して、発話の感情価と視線・表情との関連を調べた研究についてポスター発表を行いました。

これらの研究発表のほかに、表情解析のワークショップが毎日行われていたことは、この学会の特徴として挙げられると思います。表情表出の記述のために心理学で標準化された方法として、Ekman & Friesen (1978) による FACS (Facial Action Coding System) がありますが、表情の動きはそもそも微細であり正確にコーディングするのはたいへん困難です。このワークショップでは、研究グループ間でコーディングの仕方が異なることの無いように、様々な事例を紹介して是非を議論していました。とりわけ本年は FACS 誕生から 30 周年ということもあり、Ekman & Friesen の功績をたたえつつ、解析技術の発展の重要性も指摘されました。2 次元の画像だけでなく 3 次元画像からの解析、動画表情の自動コーディングがその一例です。

以上、著者にとって初めての参加となったヨーロッパ表情学会の様子と著者自身の発表についてまとめました。海外の発表で、不慣れな英語を使いながらも世界各国から集まった研究者たちと議論し、非常に有意義な学会参加となりました。関心を持ってポスター発表を聞いてもらい、著者らが行っている研究の重要性を再認識しました。今後も、世界を意識した研究活動を行っていきたいと決意を新たにしました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008年 9月 2日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 同志社大学文学部心理学科嘱託講師

氏 名 友野 隆成



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 26 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany・Berlin・International Congress Centrum ICC Berlin ドイツ・ベルリン・国際会議場
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	友野 隆成 同志社大学文学部
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Intolerance of ambiguity, interpersonal life events, and mental health あいまいさへの非寛容,対人ライフイベントと精神的健康
補 助 金 額	150,000 円 (内訳: 渡航費および宿泊費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

私は日本心理学会による国際会議参加旅費補助金の援助を受け、ドイツのベルリンで7月20日(日)～7月25日(金)に開催された第29回国際心理学会議において、「Intolerance of ambiguity, interpersonal life events, and mental health」という題目でポスター発表を行った。

発表日が25日(金)の最終日であったために、それまでの間は様々な発表内容を見て回った。特に、ブルガリアのKatya Stoycheva氏による「Tolerance for ambiguity, creativity, and personality」というシンポジウムが、一番私の興味をそそるものであった。わが国では ambiguity tolerance を扱った研究はいくらかなされているが、いずれも副次的に扱われているに過ぎず、そのものずばりを扱った研究はほとんどない。まして、ambiguity tolerance だけでシンポジウムが開催されることはまずあり得ないだろう。その意味で、今回の学会参加の目的の一つは、このシンポジウムに参加することであると言っても過言ではない。

シンポジウムでは ambiguity tolerance と創造性の関係性について、さまざまな話題提供が行われた。特に、ambiguity tolerance と類似した様々な概念(認知的完結欲求、認知的構造欲求、不確実性への耐性など)を整理し、complexity tolerance を提唱した Matthias Radant 氏のプレゼンテーションは、今後の研究のヒントとなるようなものであった。一方で、世界の ambiguity tolerance 研究が私の行っている研究よりもはるか先を進んでいるという印象は受けず、努力すれば彼らの研究に追いつけるであろうという実感を持った。私は英語が苦手であり、自分の研究を世界へ発信するということに抵抗があったが、このシンポジウムに参加して、今後頑張ってみようというモチベーションにつながった。

一方、私の個人発表であるが、最終日の午前中ということもあり、客足は悪かった。両隣が欠席という状況で、暇を持て余している時間帯が長かった。隣の隣で発表していたドイツ人研究者も、私と同様暇を持て余しているようであったので、お互いの研究を紹介することになり、刺激を受けた。また、しばらくすると他の研究者が数名ポスターを見に来てくれた。特に、台湾の研究者から私が以前に作成した尺度の翻訳をしたいとの申し出があったことは、研究者冥利に尽きることであった。上述のように私は英語が苦手であり、コミュニケーションとしては甚だ未熟なものであったが、今回の発表は研究成果の世界への発信の重要性を、頭ではなく体で理解する貴重な体験となった。

最後に、この機会を与えてくださった日本心理学会国際会議参加旅費補助金関係者の皆様方に、深謝申し上げる次第である。

08005

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008年 7月 30日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学人間科学研究科博士前期課程2年

氏 名

小林 仁



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 第29回 世界心理学会会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008年 7月 20日 ~ 2008年 7月 25日
旅 行 期 間	2008年 7月 19日 ~ 2008年 7月 27日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum (ドイツ、ベルリン、国際会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小林仁 (大阪大学人間科学研究科) 渥美公秀 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	A trial to change the social representations of the real community (実コミュニティにおける社会的表象の変化の試み)
補 助 金 額	150000 円 (内訳 航空券費用 244450 円のうちの 150000 円分)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

はじめに

このたび、日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金をいただき、2008年7月20日から25日にかけて、ドイツ・ベルリンにおいて開催された XXIX International Conference of Psychology に参加させていただきました。簡単ではありますが、参加の報告をさせていただきたいと思います。

大会について

第29回を数える今回の ICP は、大会パンフレットによると、世界100カ国以上からの約8000名の発表者を迎える大会となった、とのこと。会場には、約40室のセッションルームが準備され、数多くのセッションが並行されました。

他の研究者の研究発表について

並行しているセッションが数多く、興味を持ったものをすべて回りきることができなかったことが残念ですが、大会期間中複数のセッションに参加し、各国の研究発表やその議論に対する聴衆の関心などを耳にすることができました。特に印象深かったものとして、S-003「Why psychology moves towards the qualitative: Epistemological foundations」の質的な研究への志向に関する議論、FP-228「Creativity and Culture I」の創造性に関する定義や実験に関する議論が挙げられます。自分の研究に関連のある分野が、心理学の他分野に目をやってみれば、すでに数多く議論されていることを発見できた事、また、そういった分野で現在積極的に研究を進めている研究者の方々のお名前やご所属を伺い知ることができた事は、大変良い経験になりました。どこ国の、どういう機関にいる、誰が、その分野で今活躍されているのかを直接目にしたこの経験は、内外の研究を参照するにあたり、大変心強い収穫となったと感じております。

自身の研究発表について

私は大会3日目の22日にポスター発表させていただきました（発表のタイトルは「A trial to change the social representations of the real community」（発表番号：PS-Tue-pm-276）とし、事前に提出した Title からの変更はありません）。

ポスター発表は、連日午前・午後の部が開催され、各回につき450件前後の発表が設定されました。が、実際のところ、決して少なくないキャンセルが毎回あったように見受けられました。実際の発表は300件前後だったのではないかと推測されます。ポスター発表では、特に日本からの参加者が多かったように感じます。日本の心理学者が、精力的に国際学会に参加していることを実感しました。

私の発表では、特に6名の方と時間をとってディスカッションをさせていただくことができました。まず、素朴に研究のフィールドの新奇性や、フィールドにおける成果物についての関心や評価のお言葉を頂きました。フィールドに出て研究を進めている身として、場合によっては全くそのフィールドに理解を示していただけない場合も多々あるため、心理学を専門とされる研究者の皆様からこのような評価をいただけることは、大変ありがたいことであると感じました。そして同時に、社会心理学における実践的な質的研究のあり方とその評価法や研究者の研究姿勢についての議論、また社会心理学における他の理論概念を用いた場合の分析・解釈の可能性についての議論をさせていただくことができました。特に議論の場では、同じ世代と見受けられる方々から、多くの建設的なご指摘やコメントをいただきました。残念ながら私の力量不足ゆえに、その場で納得していただけるお答えができたとは到底言いがたいのですが、今後研究を進めてゆくにあたりぜひ言及しておくべき点を指摘していただけたことは、大変貴重な経験となったと感じております。

おわりに

今回の ICP 参加によって、世界の中での現在の日本の心理学の立ち位置、現在の心理学界の中での関心の動向、日本の研究者である自分たちが目指すべき方向性、といった点を、不十分ながらも身をもって感じ取ることができたように思います。今回得た様々な次元における収穫は、ぜひ今秋の日本心理学会や研究論文で活かしたいと考えます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2009年3月2日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京女子大学 文理学部心理学科教授

氏 名 今井 久登



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および	XXIX International Congress of Psychology 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 8 月 20 日 ～ 2008 年 8 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 8 月 19 日 ～ 2008 年 8 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場)	Germany, Berlin, Internationales Congress Centrum ICC Berlin ベルリン, ドイツ, ベルリン国際会議センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属	今井 久登 (東京女子大学) 石井 幸子 (東京女子大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	An experimental investigation of involuntary, uncued remembering of prospective memory 手がかりがない場合の展望記憶の不随意的想起に関する実験的研究
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 旅費の補助として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

貴学会の国際会議等参加旅費補助金を得て、2008年8月20日から25日までベルリン国際会議センター（ドイツ、ベルリン）で開催された、第29回国際心理学会議にて研究発表（口頭発表）を行うことができた。発表した研究は、展望記憶（prospective memory）の不随意的想起、特に外的な想起手がかりがない場合の不随意的想起過程を実験的に検討したものである。展望記憶とは、過去の経験や知識の記憶（回顧記憶）と異なり、後で行う用事や意図を記憶しておき、必要なタイミングで想起するタイプの記憶である。これまでの展望記憶の実験的な研究は、用事を思い出すための外的な手がかりが呈示された時の想起過程にもっぱら注目されてきた。他方、日常場面では、外的な手がかりなしで用事を自発的に想起しなければならないことがままあるが、そのような不随意的な想起の過程についてはこれまで実験的に研究されてこなかった。そこで本研究では、このような外的手がかりがない場合の展望記憶の不随意的な想起がどのようになされるのかを実験的に検討した。

口頭発表は8月24日午後の“Time Perception（時間知覚）”のセッションに割り当てられた。展望記憶の想起には時間的タイミングが重要であるとは言え、展望記憶の研究背景とは異なるセッションであったため若干危惧されたが、海外の展望記憶研究者と活発で有益な質疑応答をすることができ、今後の研究の進展のために有益な情報を得ることができた。

その他にも、たくさんの keynote やシンポジウム、研究発表に参加することができ、多くの情報を得ることができた。また、進行中であった海外との共同研究について、北米側の研究者と直接会って打ち合わせをする機会が得られたことも、大きな収穫であった。貴学会の国際会議等参加旅費補助金を与えられたことに対して、心から感謝申し上げる次第である。

なお、今回発表した研究は、平成17年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤C）（課題番号18530570、研究代表者：今井久登）の援助を得て行われたものである。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008年 8月 19日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科・
博士特別研究員

氏 名 高 橋 尚 也 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 2008 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008年 7月20日 ～ 2008年 7月25日
旅 行 期 間	2008年 7月20日 ～ 2008年 7月26日 (申請時は7月27日までとしたが、航空券が確保できず26日までとした)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	International Congress Centrum, Berlin, Germany (ドイツ連邦共和国・ベルリン・国際会議場)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	高橋 尚也・筑波大学 (Naoya Takahashi, University of Tsukuba)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Factors Regulating Citizen Participation of Community Activities in Japan 日本におけるコミュニティ活動に対する参加を規定する要因
補 助 金 額	150,000円

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、日本心理学会より、「国際会議等参加旅費補助金」を得て、ドイツ連邦共和国で開催された、国際心理学会議に参加する機会を得たことを、心より感謝申し上げます。ポスドク職にある申請者にとって、この経済的支援がなければ、到底、国際会議へは参加することは叶いませんでした。以下、補助金の使用状況、発表・参加の状況について、順に報告を行います。

1 補助金の使用状況

補助を受けた150,000円は、東京（成田）⇄ベルリン(デーゲル)の往復の航空券運賃として全額使用した。航空券運賃は燃料税込みで、248,760円であった（領収書添付）。

2 発表・参加の状況に関する報告

（1）ポスター発表

ポスター発表は、7月24日の午後の時間帯に行われた（P S - T h u - p m - 2 9 5）。フロアにおける討論においては、主に中国の心理学者からの質問が相次いだ。発表内容が **citizen participation** であることや、行政が関係した **community** 活動であることから、市民化の進行途中で、官の力が強い中国において、興味を惹いたものと考えられる。市民参加・地域活動という国内状況を研究テーマとしている申請者は、国際学会という性質上、異なる政治システム・状況にある研究者からの反応を期待していたため、官の力が強い状況における、行政と市民との活動を、国際比較的に研究していく展開について、大いなる可能性を感じた。

アブストラクトを以下に掲載する(発表ポスターを別紙に添付する)。

[Abstract] In Japan, the importance of civil participation is argued. However, the lowness of interest for politics and society is pointed out. This study performed the survey for randomly sampled 600 adults in Musashino-city to examine factors regulating civil participation for problem solution activity in community. Women, 40's, and having a schoolchild in one's family had high participation rate. Multiple discriminant analysis (discriminant rate 60.2%) indicated that participation was determined by the number of organizational affiliation in community. Intention to participate was promoted by communication with neighbors and profit for oneself or one's family brought by activity.

（2）参加の状況

いくつかのシンポジウムに参加し、多数のポスター発表を見た。例えば、“Democracy, responsibility and civic participation” という招待シンポジウムでは、主に、スロバキアの心理学者たちが、**civic participation** に関する、量的研究・質的研究の報告を行っていた。高く評価した点は、半構造化面接法に基づく質的データを、アフターコード化して量的データとする努力を行っていた点である。一方で、疑問を感じた点は、質問文の誘導性であり、今後の精緻化が必要と感じた。

このように、いくつかのシンポジウムに参加し、申請者が感じたことは、決して英語が母国語ではない海外の若手研究者が、積極的にシンポジウムや話題提供を行っていたことである。中には、決して英語として流暢でないものもあった。しかし、日本人研究者においては、その参加者数の多さに比して、話題提供数は少ないように感じた。方法論的には、日本の心理学は厳密性が高いと感じたので、今後は、英語への不安を脱ぎ捨てて、シンポジストとして研究発信をしていく必要があると強く感じた次第である。この点は、申請者を含め、日本人（若手）研究者に課せられた今後の課題である。

2008 年 9 月 24 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名

氏名

多屋頼典



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	ECVP ヨーロッパ知覚学会 (31st European Conference on Visual Perception)
公式ホームページ URL	http://www.ecvp2008.org
開 催 期 間	2008 年 8 月 24 日 ～ 2008 年 8 月 28 日
旅 行 期 間	2008 年 8 月 19 日 ～ 2008 年 9 月 6 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Netherlands, Utrecht University, Helmholtz Research Institute オランダ、ユトレヒト、ユトレヒト大学、ヘルムホルツ研究所
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	多屋 頼典 岡山大学社会文化科学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Pulfrich-like effects under monocular viewing 単眼でみるプルフリッヒ様効果
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 交通費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

ECVP への参加の前後に共同研究者の Ehrenstein 先生(Dortmund 大学、ドイツ)の研究室に立ち寄った。日頃はメールのやりとりだけで共同研究を進めて来たので、やはり実際に刺激図形を観察してもらって発表内容の妥当性を確認しておく必要がある。発表後にも再度立ち寄り、結果の解釈について討議を重ね、今後の行動計画を立てた。

ECVP の開会式は駅近くの大聖堂で行われ、開会宣言後にカナダからこられた Howard 先生の 3 次元知覚の講義があった。数百年の歴史のある大聖堂で行われる講義に、「中世の大学」もこんな様子だったのだろうと感激した。講義はスライドがたくさん使用されたのでわかりやすかった。途中みんなが笑ったシーンがあったが、講演者の入浴中の裸体(もちろん胸から上だけ)のスライドが提示されていた。講演にはユーモアが不可欠なのだろう。

ECVP での筆者の発表は 25 日で、ポスター発表であった。東京大学の佐藤先生をはじめ、顔見知りの日本人があちこちで発表していた。後でわかったことだが、全体の参加者 700 数十人中、日本からの参加者は 68 人もいたそうで、オランダ、ドイツ、アメリカの次ぐらいに多かった。Freiburg 大学の Spillmann 先生によると、最近はいつも日本人が多く来ているそうである。Freiburg 音大でも日本人をたくさんみかける由。

筆者の発表は運動要因次第では単眼でも奥行きが知覚できる、というものだったが、デモで実際にその現象を観察してもらったことが良かったのか、次々に訪問者があり、ずいぶんにぎわっていた。大抵の場合は「確かに奥行きがみえる」といって満足してもらえたが、2 人の人から見えないといわれてしまった。実は持参したノートパソコンに多少問題があったことを知っていたが、今更どうしようもない。帰国後はこの部分をよく検討しておく必要がある。

口頭発表は大きな階段教室 2 部屋で行われていた。オランダ本国の学生や論文をよく見かける有名な先生方が中心になって発表していた。説明の脇役として何気なく提示されている写真にヨーロッパの歴史や伝統を感じ、日本がこの水準に達するにはまだまだ努力する必要があることを思い知らされた。

大聖堂での講義には後日もう一度参加したが、この時には実験の話は全く無しで、サイエンスの歴史や自分の過去を振り返りながら発表者の人生哲学を紹介していた。こういう講義が聴けるのも ECVP の特徴であろう。公開講座に町の教会を使う、という部分にも感心した。反響音のために言葉が聞き取りにくくなるが、雰囲気は最高である。

ECVP はカナダやアメリカも含めて世界中から研究者が集まる学会であり、また街の風景には数百年以上の歴史が感じられるので、大変魅力のある学会になっている。機会があれば今後も参加してみたい。

08009

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 7 月 30 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関 関西学院大学大学院文学研究科

氏 名 平田 佐智子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 2008 (ICP 2008) 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 17 日 ～ 2008 年 7 月 28 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Internationales Congress Centrum ICC Berlin. Berlin, Germany (国際会議センターICC ベルリン、ベルリン、ドイツ)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	Sachiko HIRATA, Kwansei Gakuin University (平田佐智子 関西学院大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Cross-modal interaction between visual brightness and image of consonants (視覚的明度と子音のイメージの感覚間相互作用)
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 : 航空券代 203,680 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2008 年 7 月 17 日から 28 日にかけて、第 29 回国際心理学会議 (ICP2008) に参加するためベルリン (ドイツ) に滞在しました。ヨーロッパに赴く機会はありませんので、これを機に Max-Planck Institute Psycholinguistics (Nijmegen, Netherland) に訪問する予定を立て、旅行期間を多めに取っていましたが、直前に先方のご都合で取り消しとなってしまったためこの訪問は叶いませんでした。

ICP2008 では各国から非常に多くの研究者が参加しており、特に開催国であるドイツ、他に日本、アメリカ、中国の研究者が多いように感じました。学会は午前 8 時から午後 6 時 45 分までシンポジウムや招待講演、ポスターセッションが並行して開催されました。ポスター発表は 1 セッション (3 時間) の間に 400 以上のポスターが展示され、私は 23 日午前のポスターセッションで発表を行いました。ポスター発表では在席時間中に周囲の類似した研究を行っている研究者とコミュニケーションをすることができ、この点が有意義であったと思います。

また、いろいろなシンポジウムにも参加したことで、論文や本で名前を見ることしかなかった著名な研究者を間近で見ることができ、これらの方々が決して雲の上の存在ではなく、私と同じように活動している研究者なのだと感じました。

この初めての国際学会に参加し、国際学会におけるスタンダードなポスターの作り方・ポスター発表の行い方・国際学会でのコミュニケーションの仕方を学んだと同時に、英語を母国語としない外国人と比較して自身の英会話能力に不満を覚えました。特に、国際学会ではこのような英語を母国語としない方や、母国語であっても非常に早口で講演をする方が多いので、ある程度聞き取りにくい英語にも対応できる能力が必要となるように思いました。

以上を参加報告書とします。旅費補助に心から感謝いたします。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 19 日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 兵庫医科大学・講師

氏 名 室井 みや

印

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Congress of Psychology 国際心理学会
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 18 日 ～ 2008 年 7 月 25 日 (飛行機の関係で変更しました)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	ドイツ・ベルリン・ICC Berlin
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	室井みや・兵庫医科大学
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Effect of auditory information processing of brightness judgment
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 航空券の一部として 100,000 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

国際心理学会 (ICP) は、7 月 20 日から 25 日まで、6 日間に渡り、ベルリン郊外の国際会議場(ICC Berlin)で行われました。

1 日目は Opening Ceremony とレセプションが開催されました。受付は、予想外の長蛇の列で、30 分ほど並ぶこととなりました。周りの様子を見たところ、日本人の姿は思っていたよりも多くなく、ヨーロッパや中東の参加者が多いように思いました。Opening Ceremony では、German Federation of Psychologists' Association の会長による講演、ベルリンフィルによる演奏や自転車のパフォーマンスなどが行われました。Opening Ceremony が行われた大きなホールはほぼ満席で、遠くからしかステージを見ることができず、あらためて参加者の多さに驚きました。

2 日目から研究発表が行われ、6 日目までの間に、161 の招待シンポジウム、298 のシンポジウム、422 セッションの口頭発表に加え、数多くのポスター発表などが行われました。研究テーマとの関係で興味のあったクロスモダリティに関する発表はそれほど多くなく、ポスター発表をいくつか見ることにとどまりました。また、今年の 4 月から現所属先である医学部に移ったため、医療に関係するテーマについても関心を持っていたのですが、それらについては、HIV 等の疾患を持つ人の治療や心の問題、うつ病、統合失調症などの精神障害のメカニズムについての研究や精神障害を抱えた人の日常生活に関する研究、精神遅滞のある人を取り巻く各国の状況など、様々な視点による幅広い研究発表が行われており、今後の授業や、研究に役立たせることのできそうな情報を得ることができました。

3 日目には、"Effect of auditory information processing of brightness judgment"というタイトルでポスター発表を行いました。視覚情報と同時に呈示された聴覚情報が、視覚情報の捉え方に与える影響について検討したものです。ポスター発表は大きなホールで行われ、午前と午後にそれぞれ 500 弱の発表が予定されていましたが、キャンセルが多く、実際の発表が行われていたのは、2/3 強程度だったように思います。同時にシンポジウムも行われていましたが、ポスター会場にも多くの参加者が足を運んでいました。

今回の国際心理学会は、規模は大きくても、テーマが多様なため、特定のテーマに興味を絞って参加するには、少し物足りなさを感じるようにも思いました。しかし、普段、なかなか、自分のテーマ以外の研究に目を向けたり、発表を聞いたりする機会が少ない中で、ヨーロッパやアメリカだけでなく、アジアやアフリカ、中東の研究者たちがどのような興味を持ち、どのような研究が行われているのかを肌で感じる事ができたという意味で、貴重な経験ができたと思います。世界のあらゆる地域からの参加者や研究を目にし、“心理学”が幅の広い学問であることを改めて実感することができ、心理学のイメージが少し変わったように思いました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008年9月28日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関 大阪大学大学院人間科学研究科
対人社会心理学研究室 博士後期課程1年

氏 名 笠置 遊



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 2008 2008 年 第 29 回 国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/home.html
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 18 日 ～ 2008 年 7 月 26 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum ICC Berlin ドイツ・ベルリン・ベルリン国際会議センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	笠置遊・大坊郁夫 大阪大学大学院人間科学研究科 対人社会心理学研究室
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The effect of the multiple audience problem on self-presentation. 複数観衆問題が自己呈示に及ぼす影響
補 助 金 額	150,000 円

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

申請者は、2008年7月20日～25日にドイツのベルリンで開催されたICP国際心理学会議に参加し、ポスター発表を行った。発表内容(日本語)は以下の通りである。

問題

人は、異性関係において、特に重要だとされる外見的魅力を非常に肯定的に呈示し、一方で、特に重要ではない外見的魅力以外の特性については、同性に対して呈示するイメージと異ならないことが明らかにされている(Leary et al., 1994; Swann et al., 2002)。これらの研究は、2者間コミュニケーションにおける自己呈示に焦点を当てている。しかし、実際の自己呈示場面には周囲に他者が存在することも多く、特に、別の印象を与えたい2人以上の他者が同じ場面に存在するとき、複数観衆問題というジレンマが呈示者に生じる(Fleming, 1994)。異性に対して外見的魅力を非常に好ましく呈示することは、同性の他者からのネガティブな評価を導きかねない。そこで外見的魅力の自己呈示を抑制してしまうと、異性に魅力的な印象を与えられない。つまり、異性への自己呈示場面に同性が居合わせるとき、呈示者はどちらに合わせた自己呈示をすればよいかという複数観衆問題に陥るだろう。

方法 実験デザイン 2(女性観察者:有 vs.無)×2(実験協力者の性別:異性 vs.同性)

女性参加者103名が、実験協力者と会話した。女性観察者有条件では、もう1人の参加者が観察者として2m離れた席に座り、会話を観察していた。会話終了後、会話参加者に会話相手への自己呈示動機(12項目7件法; 谷口・大坊, 2005)を尋ねた。後日、撮影したVTRをもとに、仮説を知らない4名の独立したコーダー(大学院生男女各2名)が、参加者が会話相手に対してどのくらい自己呈示行動を行っていたかを評定した。

結果

自己呈示動機(自己報告) 異性条件の参加者は、同性条件よりも外見的魅力の自己呈示動機が高かった($F(1, 101)=10.58, p<.01$)。また、観察者有・異性条件(複数観衆条件)の参加者は、他の条件よりも社会的望ましさや個人的親しみやすさの自己呈示動機が高かった($F_s(1, 101)=4.49, 9.13, p_s<.05, .01$)。

自己呈示行動(第三者評定) 複数観衆条件の参加者は、他の条件よりも外見的魅力の自己呈示行動があまり見られなかった($F(1, 101)=11.43, p<.01$)。一方で社会的望ましさ、個人的親しみやすさの自己呈示行動は顕著に見られた($F_s(1, 101)=26.60, 15.65, p_s<.01$)。

考察

異性への自己呈示場面に同性の他者が居合わせる複数観衆状況では、呈示者は異性に対して外見的魅力を好ましく呈示したいと思っているにも関わらず、同性の観察者からのネガティブな評価を導く可能性が高いため、外見的魅力の自己呈示を控えると解釈された。一方、外見的魅力の自己呈示を抑制するだけでは、異性に対する自己呈示目標が達成され得ないため、同性の観察者からのネガティブな評価を受ける危険性の低い、社会的望ましさや個人的親しみやすさの自己呈示がより顕著になるという補償的自己高揚呈示(Baumeister & Jones, 1978)が行われるという仮説は支持された。今後、親密性を操作した検討が必要であろう。

以上の内容を発表し、国内外問わず多くの方から示唆を得ることができた。

まず、1番多く質問をいただいたのは、外見的魅力の自己呈示行動の評価の際、評価者が参加者のどのような言語・非言語的行動に着目したのかどうかである。評価者へのインタビューで、参加者の“上目遣い”や仕草の女らしさが挙げられたことをお答えしたが、本発表のデータからは厳密な答えは言えない。よって今後、非言語的行動のコーディングを行い、評価者の評価と比較検討する必要があると考えられる。

また、本研究は女性参加者を対象としたものであったため、男性ではどのような結果が得られるのかというご質問もいただいた。Swann et al. (2002)では異性への自己呈示における男女差は触れられていないが、男性は女性よりも自分の能力を誇張するという知見もあることから、複数観衆問題への対処法が異なる可能性も考えられる。今後男性も対象とした研究を行いたい。

最後に、文化差についてもご示唆をいただいた。日本人と比較して欧米人は高揚的であるといわれる。本研究が対象とした日本人よりも、欧米人を対象としたときの方が表出される自己呈示行動が顕著になるであろう。

他にも多くのご示唆をいただくことができ、今後研究を進めていく上で有益な機会となった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 20 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院総合文化研究科
(修士課程 2 年)

氏 名 星野 貴俊 (印)

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 29 th International Congress of Psychology (ICP2008) 第 29 回 国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	International Congress Centrum (ICC), Berlin, <u>Germany</u> (於)ドイツ・ベルリン・国際会議場 (ICC)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	<u>星野 貴俊</u> (責任発表)・丹野 義彦 (東京大学大学院総合文化研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Independent—Interdependent self schemas and <i>Taijin-kyofusho</i> Symptoms: Cultural Factors in social anxiety variant. (相互独立 - 相互協調的自己スキーマと対人恐怖症状に関する検討)
補 助 金 額	15 万円 (内訳: 旅費, 18,2 万円 (資料別途添付); 大会参加費, 1,65 万円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、日本心理学会さまからの海外渡航費援助を受け、ドイツ・ベルリンにて開催された第 29 回国際心理学会議（International Congress of Psychology：ICP2008）に参加する機会を得ましたのでご報告致します。

この会議は 7 月 20 日から 25 日までの 6 日間に渡り開催された大規模な国際会議で、4 年に一度（オリンピックの年）の開催スケジュールですが、まだ研究生活も駆け出しの修士 2 年次に折りよく参加できたことは幸運の至りであったと考えています。連日、朝の 8 時頃から夜まで 90 分～180 分のスパンで公演・シンポジウム・各種発表が並び、興味のアンテナを広げれば聴きたい発表が同一セッション内に複数あるというありがたくも悩ましい状況でした。

私自身は臨床心理学・精神病理学をフィールドにしているものの、その範囲に限ってみても方法論、パラダイムの多様さに驚かされました。特に、この領域では認知科学・（脳）神経科学的手法の発展は目覚しく、海外では医学者に限らず心理学者も盛んに MRI などの機器を用いた研究を行なっていることに改めて気付かされました。これらのパラダイムは今後のこの領域の主流をなすのではないかと、この印象を受けました。

国際会議では、英語力の不安が付き纏うこともありますが、世界各国から研究者の集う ICP のような会議では、英語圏以外の国や地域からの参加者も多数に上り、決して流暢でなくともコミュニケーションが図れることを実感しました。このような経験も今後国際的な活動を視野に入れるに際して有意義だったと考えています。

以上、会議への参加報告をもって、この得がたい機会を可能ならしめていただいた日本心理学会諸兄への感謝に代えさせていただきます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 27 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 愛知学院大学心身科学部
非常勤講師

氏 名 赤 嶺 亜 紀 (印)

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International congress of psychology (ICP2008) 第 29 回 国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Dutschland, Berlin, Internationale Congress Centrum ドイツ・ベルリン 国際会議場
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	赤嶺 亜紀 (愛知学院大学心身科学部) 木田 光郎 (愛知学院大学心身科学部)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Difficulty of stimulus discrimination and reaction times for negative emotional pictures. 刺激弁別の難易と不快画像に対する反応時間
補 助 金 額	150,000 円 (内訳: 航空券 204,850 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は国際会議参加にあたり旅費の補助をいただきましたことを、心から感謝しております。渡航中は事故もなく、快適に過ごすことができました。ありがとうございました。

今夏の国際会議参加は私にとっては初めての経験であった。事前に、国際会議での発表経験をもつ先生から、そこには多様な領域の研究者が参加しており、対話する方が必ずしも自分の研究領域に精通していないため、詳細な討論よりはむしろ研究紹介といった趣が強いと聞いていた。発表当日は拙い英語で細やかな議論することに自信はないものの、少し気を楽しんで臨んだ。

パネルの前で立ち止まった方へハンドアウトを手渡し、おずおずと“**Could you tell me your comments?**”と声をかけると、ただ“**Very interesting**”と言って去る方もあったが、中には数分間ポスターをみてから丁寧に質問をされる方があった。今回の私たちの発表は、不快情動が認知活動に及ぼす影響を反応時間データから検討したものであるが、実験では通常の弁別反応課題ではなく、変則的な課題を工夫して用いた。この点は本研究の特徴のひとつと考えているが、そこに興味を示す方がいたことはうれしいことであった。一方、情動処理と認知処理の関連について、脳の機構と対応させて熱心に質問される方があったものの、私が十分に意図を理解できず、的確な討論に発展させられなかったことは残念であった。

ところで、国際会議に参加して、あらためて心理学研究の課題や方法が広範にわたることを実感した。そして、これから研究を展開していくとき、自らの研究を心理学領域の中でどのように位置づけるのかということを考えさせられた。

会期中は発表件数の多さに圧倒され、どの会場へ行くべきか決めかねてしまい、あまり多くのプログラムには参加しなかったが、演題にかかわらず著名な研究者の発表の場へ気軽に足を運んでみてもよかったかなと思っている。また、私が普段、目を通す論文のほとんどが欧米の研究者によるものであるが、この会議にはアジアやアフリカからの参加者も散見された。たとえ熟知していないテーマであっても、多くの研究者の志向に直にふれることによって、心理学の動向と自らの位置づけについて、少なからぬ示唆が得られたかもしれない。大会を終えて、会場で目につく発表あれば、知識の乏しい領域であっても、気後れせずアプローチすることが国際会議の一興のように思われる。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008年 9月 17日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋学芸大学短期大学部
現代総合学科・教職課程 講師
氏 名 崎 濱 秀 行 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	第 29 回国際心理学会議 (X X I X International Congress of Psychology)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008年 7月 20日 ～ 2008年 7月 25日
旅 行 期 間	2008年 7月 19日 ～ 2008年 7月 26日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Internationales Congress Centrum (ICC) ,Berlin, Germany (国際会議場 / ベルリン / ドイツ連邦共和国)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	崎 濱 秀 行 (名古屋学芸大学短期大学部 現代総合学科 専任講師)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	What changed about writing activities through repeated writing practice? (繰り返し書くことで文章産出活動の何が変化したか?)
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 交通費 ・ 参加費 ・ 宿泊費)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

第29回国際心理学会議に参加して

7月19日～26日までの1週間、国際心理学会議出席のため、ドイツ連邦共和国（ベルリン国際会議場）を訪問しました。海外の学会に参加するのは今回が初めてであり、行く前は「学会発表を無事に終えることができるだろうか？」「現地に無事到着できるのだろうか？」「日本語の通じない土地で1週間無事に過ごせるのだろうか？」など、実に多くの不安を抱えていました。その一方、様々な国の研究者と情報交換するチャンスでもあり、楽しみにしていた部分もありました。このように、様々な気持ちが交錯する中で1週間が始まりました。

日本出発から20時間あまり、まずは19日夜（現地時間）、ドイツに到着しました。学会は21日開始でしたが、初めて訪れる土地なので、前日までに会場へのアクセス及び会場内の配置等を確認した方がよいと思い、早めに現地入りした次第です。実際、ベルリン国際会議場は大変大きな施設であり、館内の確認に少し手間取りました。また、会場までの地下鉄に乗る際、駅には日本のような改札がなく、切符を機械に通して打刻するシステムであったことから、最初はかなり戸惑いました。しかし、事前準備の甲斐あって、発表当日は落ち着いて会場にたどり着くことができました。

こうして発表当日（初日午後）を迎え、いよいよポスターセッションでの発表に臨みました。発表形式等は国内学会とそう違いはないので良かったのですが、使用言語が英語なので、やはり英語でのディスカッションがうまく行くかどうか非常に不安でした。実際、説明や質問への解答はかなりしどろもどろであったように思います。やはり定期的に英語論文に目を通すなどして、ディスカッションに使用する用語や表現のブラッシュアップが必要であると感じました。そのことはディスカッションを有意義にすることにもつながります。今後の学会発表の際に生かすつもりでおります。

このような反省点がありますが、ディスカッションを通して有益な情報が得られた場面もありました。実際、別の研究会（学会）で類似の研究（文章産出領域）に関する発表が多数行われていること、その研究会が近い将来行われることなどを知ることができました。少し先の予定ではありますが、今後研究を進める上で貴重な情報を得ることができ、大変有意義でした。発表そのものに関するディスカッションも大切ですが、こうした情報交換ができることも学会に参加するメリットだと思います。

さて、こうして発表は無事終了したわけですが、ポスターセッションに参加してみて驚いたことがあります。それは、発表時間（在籍時間）の長さです。国内の心理系学会ですと、ポスター掲示時間の中で1時間程度が在籍責任時間、という場合が多いかと思います。しかし、今回我々に知らされたのは「在籍時間3時間」という情報だけ。これにはさすがに驚きました。かなりの長丁場が予想されたため、最初は不安だったのですが、周囲の様子を見ると、発表者に対してある程度の裁量が認められていたように思われます。実際、他の発表（ポスター）への参加や休憩を適宜行っている様子が見受けられました。中には発表時間（在籍時間）半ばに来場してポスターを掲示し、ポスター前で証拠写真を撮影しただけで立ち去るというツワモノもいたくらいです。これにはさすがに唖然としましたが、私自身はできるだけポスターの近くに滞在し、見に来られる方があれば対応するよう心がけていました。

エピソードはまだまだあるのですが、せっかく海外に行ったのですから、学会以外のことについても少し触れておきます。今回は一週間滞在したのですが、あちこちでヨーロッパらしさに触れることができました。たとえば、ペットボトルやびんのリサイクルの徹底ぶり（容器回収が様々な場所で行われていること）、障害者が一人で街中を車椅子歩行している姿をよく見かけたことなどが印象的でした。わが国に比べ、バリアフリー化がかなり進んでいるように思います。学会での経験も大切ですが、このように、現地の様子を垣間見ることができたのも貴重な経験であったように思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 5 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 北海道大学大学院文学研究科

氏 名 佐藤 剛介



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 8 月 2 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, Internationales Congress Centrum ICC Berlin (ドイツ、ベルリン、国際会議センターベルリン)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	佐藤剛介 ¹ 、結城雅樹 ¹ 、竹村幸祐 ¹ 、シュグ・ジョアンナ ¹ 、大石重宏 ² ¹ 北海道大学 ² University of Virginia
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The “openness” of a society determines the relationship between self-esteem and subjective well-being (1): A cross-societal comparison
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 旅費 (飛行機代))

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

第 29 回国際心理学会議にて、The “openness” of a society determines the relationship between self-esteem and subjective well-being (1): A cross-societal comparison の題目で、ポスター発表を行いました。Culture and Psychology のセクションであり、また、周囲のポスターが数多く張り出されていないなどの理由もあってか、ポスターを見に来てくれる人々が多かったとは言えません。しかしその中でも、有用なコメントを頂くことも出来ました。

また、これまでのように日本人だけでなく、多くの外国の研究者と研究に関して交流を持てた経験は素晴らしいものであったと言えます。特に、開催地がヨーロッパであり、多くのドイツ人研究者や学生と交流を持てたと思います。これまで、北米と日本を主に研究対象地としてきた申請者の研究にとって、北米よりも古い他民族の歴史を持つヨーロッパの社会心理学や文化心理学へのアプローチは非常に勉強になったと言えます。

また、学会においても文化心理学研究の第一人者といわれる研究者の発表を聞くとともに、行動生態学や臨床心理学、発達心理学など多分野の研究に触れられたのも非常に有用であり、申請者の今後の研究や研究アプローチに有益なものとなるのではないかと思います。

※事前に旅程に関しては報告をさせて頂いておりますが、念のため旅程の報告を再度させて頂きます。第 29 回国際心理学会議出席後、翌日に第 19 回国際比較文化心理学会議（19th International Congress of the International Association for of Cross-Cultural Psychology: IACCP）に出席のため、プレーメンヘバスで移動し、7 月 27 日から 31 日まで学会参加しました。翌日 8 月 1 日に帰路に着き、日本時間の 8 月 2 日に帰国しております。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 9 月 28 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 桜美林大学大学院 国際学研究科
博士後期課程 2 年

氏 名 松田 与理子 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology (ICP2008) 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 31 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	ドイツ・ベルリン・国際会議場 The Internationales Congress Centrum (ICC), Berlin, Germany
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松田与理子 ¹ ・石川利江 ² ・柴田恵子 ¹ ・奥田訓子 ¹ ・神庭直子 ¹ 1.桜美林大学大学院国際学研究科、2. 桜美林大学
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Factors influencing Japanese patient's communication behavior during medical visits 医療面接時の日本人患者のコミュニケーション行動における影響要因
補 助 金 額	150,000 円 (内訳: 参加費 48,216 円(300 ユーロ/160.72 円:3/13 為替レート), 宿泊代 120,194 円(7/19-7/26, 99 ユーロ x7 泊/173.44 円(7/7 為替レート))

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2008年7月20日～7月25日の6日間、ドイツ、ベルリン国際会議場(The Internationales Congress Centrum)で開催された第29回国際心理学会議(XXIX International Congress of Psychology)に出席した。国際心理学会議は4年に一度開かれるが、第29回目となった本大会では、110カ国から9,300人以上が参加し、過去最大規模のコンファレンスとなった。様々な心理学の領域が一同に集まった本大会では、多数のプログラムが同時に開催されるため、参加したい内容を厳選して6日間の計画を立てることが一番難しいと思えた。

本大会において国際心理科学連合(IUPsyS)よりMattei Dogan賞を受賞したオレゴン大学のMichael Posner教授が、「Executive attention: Its origins, development, and functions」のテーマで大会3日目に講演を行った。発表内容は、脳内ネットワークの中でも自己規制に関連があるとされるExecutive attention(実行注意)の幼少期における起源と児童期の発達に関するもので、非常に貴重な講演であった。また、大会5日目には、スタンフォード大学のPhilip Zimbardo教授による招待講演が行われ、「The Lucifer effect and the psychology of evil」というテーマで、教授自らのスタンフォード監獄実験とイラクのアブグレイブ刑務所での虐待・拷問を視覚的効果も交えて示し、善良な人がどのように邪悪になるのかについての話があった。大会4日目に講演が行われたが、大会場であるにもかかわらず入場できない参加者が多数にのぼったことから5日目にも再度講演が行われ、床に座っての聴講であったが入場できたことはとてもうれしい経験であった。

シンポジウムもできる限り聴講したが、中でも最も印象に残ったシンポジウムは、カナダ、アカデミア大学のMichael Leiter教授が座長を務めた「Values, community, engagement and burnout: International perspective」でバーンアウト研究のパイオニアであるカリフォルニア大学バークレー校のChristina Maslach教授の講演を聴講できたことであった。

口頭発表も複数参加したが、筆者自身の研究と関連があり、興味深い発表を行っていたドイツ人研究者と交流が持てたこと、今後の可能性として日本とドイツの文化比較的研究も検討していくことで合意が取れたことは非常に大きな成果であったと思われる。

発表数が4,180にのぼったポスターセッションは、5日間にわたって午前と午後の2回に分かれて開催され、筆者は3日目の午後に発表を行った。ポスター発表の在席責任時間は3時間と長かったが、アジア、ヨーロッパの研究者から複数質問を受けたことをきっかけに、大会後も意見交換や情報共有などを行っていくことで合意ができてネットワークが創れたことは今後の研究に多いに役立つ意義あるものとなった。

ベルリンでは、旧東ベルリンのミッテ区に滞在した。ミッテ区(Mitte)はベルリンの中心街にあり発展が著しく、とても活気があり、世界遺産の博物館島やアレクサンダー広場、ハッカーシェ・ヘーフェなど観光名所も多い区域である。ベルリン国際会議場まではベルリンと郊外を結ぶSバーンを利用した。所用時間は約20分。駅では切符を買う機械が1～2台しかなく、購入にも時間がかかることは少し驚きであった。ベルリンの中心にはティアガルテン(Tiergarten)という大きな公園があり、実際にこの公園は今でも世界最大の市中の公園となっている。滞在中天気に恵まれたため、毎朝早朝に公園を一周ジョギングしてから大会会場に向かった。

今回のベルリン大会が筆者にとって初めての海外学会参加であったが、世界中の心理学者があらゆる領域において熱意を持って研究に取り組んでいる姿を垣間みることができ、多いに刺激を受けた。本大会ではポスター発表で参加をしたが、今後はシンポジウムや口頭発表などの形式にも挑戦し、より積極的に学会発表を行っていきたい。

最後になりましたが、本国際会議参加にあたって渡航援助をしていただき貴重な体験をする機会を与えてくださった日本心理学会関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



第29回国際心理学会議会場前

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 9 月 25 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 慶應義塾大学大学院社会学研究科
教育学専攻博士課程

氏 名 佐々木 尚



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 22 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	German, Berlin, Internationales Congress Centrum ICC Berlin ドイツ, ベルリン, ベルリン国際会議センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	Takashi Sasaki, Keio University 佐々木尚, 慶應義塾大学
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The role of the visuospatial sketchpad in associative learning 連合学習における視空間スケッチパッドの役割
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 航空運賃 150,000 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

第 29 回国際心理学会議において，“The role of the visuospatial sketchpad in associative learning” という題名の研究発表を行った。

この研究は、3 つの実験から構成されていた。実験 1 では、二重課題法によって連合学習における音韻ループと視空間スケッチパッドの役割を検討した。連合学習課題では乱数とアルファベットの対 8 対を用いた対連合学習を用いた反復学習が 5 試行行われ、この学習成績に対する二次課題の妨害効果によって作動記憶システムが連合学習に対してどれだけ寄与するかを検討した。実験の結果、視空間スケッチパッドに負荷をかける空間タッピング課題は連合学習を有意に妨害することがわかった。このことから、視空間スケッチパッドは連合学習に対して重要な役割を果たすことがわかった。また、音韻ループに負荷をかける構音抑制課題は対連合学習を有意に妨害しなかったことから、音韻ループは連合学習に対してあまり貢献しないことがわかった。

実験 2 では、再学習法を用いることにより、空間タッピング課題の長期的効果を検討した。この長期的効果を検討することによって、連合学習に対する視空間スケッチパッドの長期的役割が検討された。原学習フェーズと再学習フェーズで 4 試行ずつ乱数とアルファベットの対連合学習が行われた。実験の結果、原学習フェーズにおける空間タッピング課題の妨害効果は再学習フェーズまで持続することがわかった。

実験 3 では、実験 1, 2 より学習刺激数を減らした場合の空間タッピング課題の長期的効果が検討された。純粋な短期記憶容量は 4 ± 1 チャンクとされている (Cowan, 2001) ので、刺激対を 4 対に減らすと作動記憶負荷の影響は小さくなると考えられる。実験の結果、実験 2 とは異なり、空間タッピング課題の影響は再学習フェーズにまでは及ばなかった。また、反応時間を分析した結果、再学習フェーズで空間タッピングを行ったほうが反応時間が短くなることがわかった。

以上の結果から、連合学習において作動記憶の隷属システムの中でも視空間スケッチパッドは最も重要な役割を果たすことがわかった。また、実験 3 の結果は分脈干渉効果 (contextual interference effect; Battig, 1972, 1979) と関連があることが示唆された。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 1 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 九州大学大学院人間環境学府・博士後期課程

氏 名 小松 佐穂子 (印)

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	the XXIX International Congress of Psychology 2008 (ICP 2008) (国際心理学会議 2008)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日 * 帰国日が 25 日から 27 日に変更になりました。
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	ドイツ・ベルリン・International Congress Centrum ICC Berlin
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小松佐穂子 (九州大学大学院人間環境学府) 箱田裕司 (九州大学大学院人間環境学研究院)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The asymmetric relationship between facial identity and facial expression: the influence of facial expression (顔の人物認知と表情認知の非対称的關係 : 表情の影響)
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 航空運賃 150,000 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

九州大学大学院人間環境学府 博士後期課程 小松 佐穂子

2008 年 7 月 20 日～25 日にかけて、ドイツ、ベルリン市内にある International Congress Centrum ICC Berlin にて開催された the XXIX International Congress of Psychology 2008 (ICP 2008, 国際心理学会議 2008)に参加した。

今回、報告者は、7 月 21 日午後 (14:00～17:00) のポスターセッションにおいて、“The asymmetric relationship between facial identity and facial expression: the influence of facial expression” というタイトルで、ポスターによる研究発表を行った。今回の発表内容は、顔認知における表情認知と人物認知の関係について、マッチング課題を用いて検討を行うというものであった。

従来の先行研究では、時系列的に呈示される顔写真に対して、表情あるいは人物を判断するという“判断課題”を用いていた。この判断課題を用いた結果、表情情報は人物判断には影響しないが、人物情報は表情判断に影響をするという人物情報の干渉が見られた。しかし、本研究では、同時に呈示される顔写真に対して、ターゲットである顔写真と同じ人物あるいは表情を 4 枚の選択肢写真の中から選択するという“マッチング課題”を用いて検討を行った。従来の判断課題では、課題遂行時に利用される表情および人物情報が“記憶表象”であるのに対し、本研究のマッチング課題では、同時に呈示されるターゲットと選択肢についてマッチングを行うので、“知覚表象”が利用されており、この点が本研究の新しい点である。すなわち、知覚表象における表情認知と人物認知の関係について検討したものである。

課題は、人物あるいは表情が同じ 4 枚の選択肢の中から選択する **Base** 課題と、人物、表情ともに異なる選択肢の中から選択する **Filter** 課題の 2 種類の課題により構成されていた。実験の結果、表情を選択する課題での反応時間に人物の影響は見られなかったが、人物を選択する課題では表情の影響が見られるということが明らかになった。これらの結果は、従来の先行研究のように、記憶表象において表情認知および人物認知を行う場合には、人物情報の干渉が見られるのに対して、本研究の課題のように知覚表象を利用する場合においては表情情報の干渉が見られるということであり、これらの結果は、認知時に利用される表象の形態によって人物情報と表情情報の優位性が異なることを示すものであることを報告した。

発表後、何名かの研究者から、先行研究の結果との相違点が面白いとのコメントをいただき、また今後の研究の展開をどのように考えているのかについて質問を受けた。報告者は、今後の研究では、表象が変化することによって、表情情報および人物情報の優位性がどのように変化するかについてさらに詳細に検討するために、今回用いたマッチング課題では同時に呈示されていたターゲットと選択肢を、時間差を設けて呈示する実験を行って、表象という観点から表情認知と人物認知の関係について検討していくことを考えている旨を述べた。この点に関しては、他の研究者とのやりとりの中からも、早急に次の実験を行って詳細を明らかにする必要性があることが感じられた。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 19 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 北海道大学大学院文学研究科
修士課程 2 年

氏 名 橋 本 博 文



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 8 月 2 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, Internationales Congress Centrum ICC Berlin (ドイツ、ベルリン、国際会議センターベルリン)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	橋本博文・山岸俊男 (北海道大学大学院文学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Why People Show Self-effacing Tendency? なぜ日本人は自己卑下的傾向を示すのか
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 旅費 (飛行機代))

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

本発表は、これまでの比較文化研究において注目されてきた東アジア人(とりわけ、日本人)の自己卑下傾向を取り上げ、自己卑下傾向を集団からの排除を避けるための適応行動(デフォルトの適応戦略)として解釈可能であることを主張するものであった。本発表の主たるメッセージは、文化に特有と考えられている心理・行動傾向を、社会に生きる人々の適応行動の均衡として捉えることによって、これまでの記述の域を超えた、ゲーム論的アプローチに基づく説明が可能になる、というものである。本発表が採用するアプローチ(文化への制度アプローチ)から導き出せる予測ないし今後の展望について、国内の研究者のみならず、海外の研究者と議論することで、有益なコメント、十分なフィードバックを得ることができた。

また専門とする文化心理学、社会心理学のみならず、心理学における様々なフィールドの最新の知見に触れることで、自らの研究に応用可能な研究手法、研究パラダイムを知ることができたのも、非常に有益であった。申請者の語学力は十分とはいえないが、実際に研究に携わる人と議論することで、論文を読むことから得られる以上の知識を得ることができたと思う。

※発表者は、第 29 回国際心理学会議出席後、翌日に第 19 回国際比較文化心理学会議(19th International Congress of the International Association for of Cross-Cultural Psychology: IACCP)に出席した(学会期間:7月27日から7月31日)。そのため、旅行期間は2008年7月19日～2008年8月2日となっている。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 9 月 25 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 九州大学大学院 博士後期課程 3 年

氏 名 松本 亜紀 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology 第 29 回国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	申請期間： 2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 26 日 実期間： 2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, International Congress Centrum ドイツ・ベルリン・国際会議センター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松本 亜紀 九州大学 箱田 裕司 九州大学 渡辺 めぐみ 九州大学
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The role of response mode on Stroop and reverse Stroop interference in the group version test (集団版テストにおけるストループ・逆ストループ干渉の反応様式の効果)
補 助 金 額	150,000 円 〔内訳 往復航空費 (諸経費込み) : 179,365 円〕

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2008 年 7 月 20 日～2008 年 7 月 25 日、ドイツ (ベルリン) の International Congress Centrum (国際会議センター) で開催された XXIX International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議) に参加した。

2008 年 7 月 23 日午後のポスターセッションで, “The role of response mode on Stroop and reverse Stroop interference in the group version test (集団版テストにおけるストループ・逆ストループ干渉の反応様式の効果)” を発表した (添付の大会プログラム 249 ページの左段参照)。発表内容は下記の通りである。

青いインクで書かれた“赤”という文字のように、インクの色と一致しない色名語 (以下、不一致色名語と呼ぶ) のインクの色を口頭で答える速度は、単なる色パッチのインクの色を口頭で答える速度と比べて遅れる (Stroop, 1935)。これはストループ干渉と呼ばれている。一方、不一致色名語の語の読みに必要な時間は、単なる黒インクで書かれた語の読みに必要な時間とほとんど変わらない、つまり逆ストループ干渉はみられないことが報告されている (Jensen & Rohwer, 1966; MacLeod, 1991; Stroop, 1935)。

ストループテストの一般的な反応様式は口頭反応であり、上記の実験結果も口頭反応で得られたものであることに注意する必要がある。口頭反応では逆ストループ干渉はほとんど観察されないが、不一致色名語の語に該当する色を、複数の色パッチの中から選択して反応するマッチング法を用いると、逆ストループ干渉が生起することが確認されている (Durgin, 2000; Flowers, 1975; Pritchatt, 1968)。

箱田・佐々木 (1990) は、マッチング法を用いてストループ干渉と逆ストループ干渉の両干渉を集団で測定できる新ストループ検査を開発した。本研究では、この新ストループ検査を従来の反応様式である口頭反応と、本検査で採用しているマッチング反応で実施し、ストループ、逆ストループ干渉に対する反応様式の効果を検討した。

その結果、口頭反応ではストループ干渉のみが有意に生起したが、逆ストループ干渉は生起せず、これまでの知見 (Jensen & Rohwer, 1966; MacLeod, 1991; Stroop, 1935) と一致する結果が得られた。一方、マッチング反応では、口頭反応ほど大きくはないが有意なストループ干渉が生起し、かつ有意な逆ストループ干渉も生起した。

本研究によって、ストループ、逆ストループの両干渉は反応様式に依存して生起することが確認された。また、新ストループ検査は人間の情報処理能力を測定するための有効なツールとして使用できることが期待できると思われる。

引用文献

- Durgin, F.H. (2000). The reverse Stroop effect. *Psychonomic Bulletin & Review*, **7**, 121-125.
- Flowers, J.H. (1975). “Sensory” interference in a word-color matching task. *Perception & Psychophysics*, **18**, 37-43.
- 箱田裕司・佐々木めぐみ (1990). 集団用ストループ・逆ストループテスト——反応様式、順序、練習の効果——教育心理学研究, **38**, 389-394.
- Jensen, A. R., & Rohwer, W.D. (1966). The Stroop Color-Word Test: A review. *Acta Psychologica*, **25**, 36-93.
- MacLeod, C. M. (1991). Half a century of research on the Stroop effect: An integrative review. *Psychological Review*, **109**, 163-203.
- Pritchatt, D. (1968). An investigation into some of the underlying associative verbal processes of the Stroop color effect. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, **20**, 351-359.
- Stroop, J. R. (1935). Studies of interference in serial verbal reactions. *Journal of Experimental Psychology*, **18**, 643-662.

国際会議等参加旅費補助金報告書

08021

2008 年 8 月 5 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 北海道大学大学院文学研究科

氏 名 釜屋健吾



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	XXIX International Congress of Psychology (第 29 回国際心理学会議)
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 8 月 2 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany, Berlin, Internationales Congress Centrum ICC Berlin (ドイツ、ベルリン、国際会議センターベルリン)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	釜屋健吾・結城雅樹 (北海道大学)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Social Structure and Causal Attribution: The Influence of Relational Mobility
補 助 金 額	150,000 円 (内訳 旅費 (飛行機代))

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

私は第 29 回国際心理学会議において、“Social structure and causal attribution: the influence of relational mobility”という題目でポスター発表を行いました。この研究は先行研究で明らかにされてきた原因帰属の文化差が生じる原因を、特定の社会構造的要因に着目して検証したものです。本研究では特に当該社会での新しい対人関係の作りやすさの指標である関係流動性に着目をし、それと個々人の原因帰属の関連性を検証しました。

ポスター発表当日は大会 4 日目という大会最終日の前日で、かつ同時間帯に著名な方の口頭セッションがあったということでポスター会場へ来る人は他の日程と比較して多くはありませんでした。しかし、50 枚ほど用意した配布用ポスターがほぼなくなり、また 10 名前後の方が熱心に質問に来てくれ、個人的に非常に有意義なポスターセッションだったと感じます。社会心理学や比較文化心理学を専門としている方のみでなく、臨床心理学、教育心理学など他分野の方々に興味を持っていただきました。その理由として考えられるのは 1) 原因帰属という社会心理学の古典的な研究分野を扱った研究であったこと 2) 原因帰属と社会構造の普遍的理論の構築を目指す新しい研究であったことが挙げられると思います。

特に印象に残っている事柄として、ドイツの臨床心理学者の方と議論したことが挙げられます。その方は臨床現場の視点から、個人のみでなくその個人を取り巻く社会環境に目を向けた治療をすべきであるとおっしゃり、私の研究アプローチを臨床現場へ応用する可能性を一緒に議論しました。この議論により、これまで気づかなかった他分野との関連性を新たに発見できたのみでなく、研究成果を社会に還元していく視点を持つことの重要性を再認識する機会となりました。

本大会では自分のポスター発表以外にも、著名な方や他分野の方の講演を聴く機会が多くあり、それは心理学の幅広い知識の習得と、今後の研究に対するモチベーションの向上につながりました。また、様々な社交イベントで世界中の研究者と会話をする中で、将来的に共同研究に繋がるような人脈作りもできたと感じます。総じて、グローバルな視野で自他の研究を考察し、かつ今後の研究生活への実質的な関係性作りもできた非常に有意義な大会でした。貴学会から旅費を援助していただいたことを心より感謝いたします。

※事前にもご報告しておりますが、旅程に関して、第 29 回国際心理学会議に出席後、翌日にブレーメンに移動し、第 19 回国際比較文化心理学会議（19th International Congress of the International Association for of Cross-Cultural Psychology: IACCP）に 7 月 27 日から 31 日まで参加しました。翌日 8 月 1 日に帰路に着き、日本時間の 8 月 2 日に帰国しています。

国際会議等参加旅費補助金報告書

08022

2008年 8月 12日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 立命館大学大学院文学研究科
博士前期課程二回生

氏 名 日高 友郎



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Congress of Psychology 国際心理学会議
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.org/
開 催 期 間	2008年 7月 20日 ～ 2008年 7月 25日
旅 行 期 間	2008年 7月 21日 ～ 2008年 7月 26日 (*申請書では「7月20日～7月25日」の渡航としたが、チケットの都合ならびに同行する教員の日程もあり、21日から26日となった)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	International Congress Centrum ICC Berlin (Berlin, Germany) ドイツ、ベルリン ベルリン国際会議場
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	日高友郎 (立命館大学大学院文学研究科心理学専修 博士前期課程)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Ethnography of science cafe: A function of a facilitator in the communication between scientists and citizens. サイエンスカフェのエスノグラフィー：科学者と市民のコミュニケーションにおけるファシリテーターの機能
補 助 金 額	150000 円 (内訳 海外渡航費 (交通費))

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

International Congress of Psychology (国際心理学会議、以下 ICP) は心理学に関する最も大きな国際会議であり、世界中の多数の国からの参加者の姿が見られた。7 月 20 日から 25 日に至るまでの日程のなかで、多数のシンポジウムやポスター発表がなされるなど、大規模な大会であった。

私は海外での発表はおろか渡航そのものが初体験ということもあり、緊張の中で大会を迎えることとなったが、指導教員ならびに大学側からの指導・教示があり、特に問題なく渡航および発表をし終えることが出来た。

私の発表は 23 日の 9 時よりはじまり、3 時間の時間が割り当てられていた。形式はポスター発表であった。事前に国内での準備を万端に整えていったこともあり、順調に発表を行うことが出来た。質問を寄せてくださった方は計 10 名であり、「そもそもサイエンスカフェとは何か？」といった質問が多く寄せられたほか、「観察や会話のデータをどう処理するのか？」という方法論に関する質問も寄せられた。私自身の英会話能力ならびに学術的な知識の不足もあったが、寄せられた質問に対しては精一杯の返答を行うとともに、その場で回答できない場合には先方の連絡先を尋ね、メールにて回答を行うことで対応した。

概ね順調に発表が進んだ一方で、「人に興味を持たれる」工夫については自身の不足を痛感した。同時間帯・同会場においては 478 件ものポスターが掲載予定となっており、辞退者を除いたとしてもその数は 400 を下らないものであったと思われる。その中で来場者に足を止めてもらうためには研究内容もさることながら、足を止めてもらえるようなポスターそのものの完成度が求められていると感じた。

この点については他の発表者の工夫が勉強になった。特にポスターを紙ではなく布に印刷し掲示している参加者が印象に残っている。実際に発表者に話をうかがい、どのようにして印刷したのか、費用はどの程度のものだったか、印刷の仕上がり（色落ちやレイアウトなど）はどうか、などいくつかの質問をさせていただいた。私の英会話は拙いものであったが、身振り手振りも交え、何とか意思疎通を行うことができた。これは単に知識を得るのみならず、国際学会での振舞い方に対する自信に繋がる出来事であった。例に挙げたポスターの方法など、今回の経験は私だけでなく今回の大会への出席のかなわなかった同研究室の院生や学部生に対しても有用な知見となると考えられるため、メール等による情報の共有を進めている。

ポスターセッションの際、自由に行動できる時間が出来た場合には極力他の発表ポスターを確認するとともに、自ら話しかけ、質問することを心がけた。また、シンポジウムや講演などの企画にも参加することによって、普段はあまり触れることのない心理学の他領域についての知識が深まった。私の語学力の問題からその場では深く質問が出来ない場合や、発表者の研究内容に興味を持った場合には名詞を交換させていただき、後日必ずメールにて挨拶と資料の請求を行った。これは自身の研究の進展だけでなく、英語のメールを書く機会ともなり、非常に有意義な経験となった。

総じて、今回の学会参加を通じ、視野の広がりを実感している。実際に各国の方々とお話をさせていただく機会を得られたことで、自身の英会話の未熟さを痛感するとともに、さらに勉強する意欲へと繋がった。また、同行した指導教員が知己の研究者を紹介してくださるケースもあった。研究、英会話、人間関係、これら全ての可能性が広がったと感じている。院生としての私の責務はこうした経験を学術研究において昇華していくこと、および後の世代へと引き継いでいくことであると考えている。その意味でコミュニケーションのツールとしての英会話の重要性を改めて確認できたこと、他の研究者や院生とのネットワークが広がったことは、今後の自分の研究や将来に多大なる影響を与える出来事であったと考えている。

このような大きな経験を積む機会となった国際学会への参加を助成していただいた日本心理学会、ならびにご指導をいただいた佐藤達哉先生、発表のために現地に同行していた同研究室の滑田明暢氏に感謝いたします。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2008 年 8 月 5 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程

氏 名 浅井 智久 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	International Congress of Psychology 2008 (ICP2008) 国際心理学会議 2008
公式ホームページ URL	http://www.icp2008.de/
開 催 期 間	2008 年 7 月 20 日 ～ 2008 年 7 月 25 日
旅 行 期 間	2008 年 7 月 19 日 ～ 2008 年 7 月 27 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	German・Berlin・International Congress Centrum ICC Berlin ドイツ・ベルリン・ベルリン国際会議場
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	浅井智久 ^{1,2} ・丹野義彦 ¹ ¹ 東京大学総合文化研究科 ² 日本学術振興会 (特別研究員 DC1)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Bimanual coordination in predicting one's own movements in motor control 自己運動の予測における両手間協力
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 旅費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2008年7月20日から7月25日まで、6日間にわたって開催されたICP2008（2008年度国際心理学会議）に参加してきました。日本からはモスクワを経由して、計13時間ほどのフライトでしたが、ベルリンではバスや電車などの公共交通機関が発達しており、スムーズな海外出張でした。領域としては、臨床系から基礎系まで何でもありで、朝の8時から夜7時ごろまで様々なプログラムが企画されていました。会議のHPによれば、参加登録者数は9000人ほどで、ほぼ同数の研究発表数があったようです。会議は国際会議場（メッセ）にて30～40ほどの部屋を使用して行われましたが、会議自体は大規模な割に、建物の作りも関係して、全体を把握するのが不可能というほどではありませんでした。唯一の難点は、各プログラムに参加する人数の把握が事前に難しいためか、人気のあるセッションに小さな部屋が割り当てられて立ち見が多く出てしまったり、またその逆の減少がしばしば見られたことです。私自身は、人気の出そうなセッションには早めに席を確保しておくよう心がけました。プログラムは、ワークショップ・シンポジウム・講演・レクチャー・ポスター発表や、ディベートなど多彩で、大きな学会ならではの、普段なかなか国内では会えないような有名研究者がたくさん参加されていました。またマイナーな領域でも、近いことをやっている人と会えるくらいの発表数があったので、非常に有意義な経験をすることができました。私自身は、「Bimanual coordination in predicting one's own movements in motor control（自己運動の予測における両手間協力）」というタイトルでポスターセッションにて発表を行いました。周りのポスターも関連したものも多く、最新の研究動向に触れることができました。国内では、「運動」に関する心理学的な領域はメジャーとは言えないので、国際学会ならではの経験であったと思います。数人の研究者とは密な議論をすることもでき、今後の研究に有益なアドバイスをたくさんもらいました。次回開催は2012年に南アフリカ共和国のケープタウンになるそうなので、十分な準備をしてまた参加できればと考えています。最後に、このような貴重な経験をする手助けをしてくださった日本心理学会に感謝を申し上げたいと思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2009 年 2 月 27 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
筑波大学大学院人間総合科学研究科・大学院生
氏 名 相 羽 美 幸

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 10 th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology SPSP 第 10 回大会
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/
開 催 期 間	2009 年 2 月 5 日 ～ 2009 年 2 月 7 日
旅 行 期 間	2009 年 2 月 4 日 ～ 2009 年 2 月 14 日 (申請時は 2009 年 2 月 3 日～2 月 9 日としたが、航空券が確保できず変更した)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Tampa Convention Center, Tampa, The United States of America アメリカ合衆国・タンパ・タンパコンベンションセンター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	相羽 美幸 (筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Problematic situations in romantic relationships of Japanese adolescents 日本の青年の恋愛における問題状況
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 往復航空券 126,240 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは、日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助金」を得て、アメリカ合衆国タンパで開催された SPSP 第 10 回大会に参加する機会を得たことを、心より感謝申し上げます。大学院生である申請者にとって、この経済的支援がなければ、国際学会で発表することは到底叶いませんでした。以下、補助金の使用状況、発表・参加の状況について、順に報告を行います。

1 補助金の使用状況

補助を受けた 100,000 円は、東京（成田）⇄シカゴ（オヘア）経由⇄タンパの往復の航空券運賃として全額使用した。航空券運賃は燃料税込みで、126,240 円であった。

2 発表・参加の状況に関する報告

(1) ポスター発表

ポスター発表は、2 月 6 日の夕方の時間帯に行われた (Poster Session D3)。フロアにおける討論においては、主にアジア圏の社会心理学者から関心を持たれた印象であった。

アブストラクトを以下に掲載する（発表ポスターを別紙に添付する）。

Previous studies of heterosocial skills have revealed many problematic situations in romantic relationships (e.g., Grover, Nangle, & Zeff, 2005). However, there were two issues with these studies. First, few studies have dealt with the situations related to the maintenance and breakup of relationships. Second, the situations in the West may not apply to Japan due to cultural differences. Thus, it is important to reveal what situations in romantic relationships are problematic for Japanese adolescents. The purpose of the current study was to identify problematic situations in romantic relationships of Japanese adolescents. 488 undergraduates in Japan completed the measures assessing the degree to be troubled or worried about problematic situations and the experiences of the situations. Factor analyses showed that there were three situations such as “approach from oneself” at development stage, five situations such as “anxiety for maintenance of relationship” at maintenance stage, and three situations such as “broken heart” at breakup stage. The results indicated that many Japanese adolescents were troubled or worried about these situations ($M=3.02-3.61$) and experienced these situations (26.8%-70.6%). Thus, there were many problematic situations not only at development stage but also at maintenance and breakup stage in romantic relationships of Japanese adolescents.

(2) 参加の状況

いくつかのシンポジウムに参加し、申請者が感じたことは、Implicit に関するシンポジウムが非常に多く開かれていたことである。様々なシンポジウムに参加することで、社会心理学において現在関心を集めている研究テーマを知ることができた点は、申請者にとって大きな収穫であった。

ポスター発表では、日本の学会に比べて、Romantic relationships に関する研究が非常に多く発表されていた。申請者が発表した Session D では、218 件の発表のうち、半数以上が Romantic relationships に関する研究であった。海外では、Romantic relationships に関する研究が主要な研究テーマとなっていることをうれしく感じた半面、あまりにも多くの発表が同じセッションにまとめられていたため、すべての発表をじっくりと見るができなかったことが非常に残念であった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2009 年 3 月 3 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院 博士研究員

氏 名 浅 井 暢 子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 10th Annual Conference of the Society for Personality and Social Psychology (人格・社会心理学会 第 10 回大会)
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/
開 催 期 間	2009 年 2 月 5 日 ～ 2009 年 2 月 7 日
旅 行 期 間	2009 年 2 月 4 日 ～ 2009 年 2 月 9 日 (研究ミーティングのため変更)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, Florida, Tampa, Tampa Convention Center (アメリカ合衆国フロリダ州タンパ市, タンパ・コンベンションセンター)
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	浅井 暢子 (名古屋大学大学院環境学研究科) 唐沢 穰 (名古屋大学大学院環境学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	When Do Disadvantaged Group Members Complain About Discrimination? : Impact of Social Support and Social Cost. (差別被害の表明に社会的サポートと社会的コストが与える影響)
補 助 金 額	100,000 円 (内訳 大会参加費 14,000 円 (\$135)・航空券 120,000 円・宿泊費 35,000 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2009年2月5日から7日の期間、The 10th Annual Conference of the Society for Personality and Social Psychology に参加した。学会では、「When Do Disadvantaged Group Members Complain About Discrimination? : Impact of Social Support and Social Cost.

(差別被害の表明に社会的サポートと社会的コストが与える影響)」と題して、差別の対象となっている集団の成員における差別被害の表明を促進・抑制する要因に関して研究発表を行った。発表は、以下の研究結果を中心に構成した。

1. 差別被害を他者に表明する場合、他者から「不満家」、「失礼な人物」といった否定的な印象を抱かれたり、報復される危険性がある。
2. 見知らぬ他者が存在する状況では、①に示した差別被害の表明の対人コストが顕現化し、被害表明が抑制される。
3. 親密な関係にある人物が存在する状況では、当該人物からの社会的サポートや共感の期待が高まり、相対的に差別被害の表明の対人コストは目立たなくなる。そのため、このような状況では、差別被害の表明がなされやすくなる。
4. 差別被害の表明には、上述のように聴衆との親密性が影響を与える一方で、聴衆の成員性(内集団成員 / 外集団成員)は影響を与えなかった。すなわち、親密性が低ければ、同じ被差別集団に所属する他者に対してでさえ、差別被害の表明は抑制された。

研究発表の際には、これらの研究成果に基づき、差別や偏見低減方略、特に差別への対抗行動を促進する要因について特に焦点を当て、議論を行った。発表中には、被差別集団の成員の心理的過程に関する代表的研究者のひとりである Mary Inman 氏(Hope University)をはじめ、対人関係研究を専門とされる John E. Lydon 氏(McGill University)や本領域に興味を持つ複数の大学院生と研究内容について議論した。差別・偏見研究をリードする欧米の研究者との議論は、申請者自身の研究に新しい示唆を与えると共に、差別研究の最新の動向を探る良い機会となった。

さらに、本学会では、「Group Processes and Intergroup Relations」領域のプレカンファレンスや、「Perceiving prejudice」と題したシンポジウムなど、自らの研究と関連の深いセッションが多く企画されており、これらに積極的に参加した。これらのセッションでは、論文内で語られていない研究の背景や詳細が述べられたり、未発表データに基づく最新の研究成果の報告が行われた。本領域の研究の最新の動向について、詳細な情報を収集できたことは、本学会の大きな収穫である。

以上の研究発表やシンポジウムで得た多くの知見は、研究成果の論文化、及び研究の発展に役立つものと考ええる。特に、具体的に着手すべき研究課題としては、以下の2点が浮かび上がった。

1. 内集団成員への差別被害の表明の抑制過程の検討
：差別への集団的対抗行動には、内集団他者への差別経験の表明が必須と考えられるため。
特に、被差別集団の成員でありながらも成功している人物とのコミュニケーションに注目。
2. 差別への個人的対抗行動(含、差別被害の表明)と集団的対抗行動の関連の検討
：差別に対して個人的に反応したからといって、集団的な対抗行動にも参加するとは限らない。
被差別集団の成員側からの差別の低減方略を考えた場合、個人的対抗行動と集団的対抗行動の関連、これらを仲介する要因の同定を行うことが必要。

今後は、これらの研究課題に関して、積極的に研究を進めていく計画である。

さらに、本学会期間中、また終了後には、現在、University of California, Santa Barbara 校に在籍している菅さやか氏と研究ミーティングを持ち、共同研究の打ち合わせを行った。海外在住の研究者と、対面でしかできない議論を行えたことは、本学会のもう一つの収穫である。

以上のように、本学会を通じて、社会心理学領域の先端研究者と直接議論したり、最新の研究報告を拝聴することができた。このような経験を経て得られた知識は、今後、研究を行なっていく上で重要な役割を持つものと考ええる。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2009年4月20日

(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 熊本大学大学院医学教育部

博士課程2年

氏 名 鈴木 華子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Society for Research in Child Development Biennial Meeting 子ども発達研究学会 隔年学術集会
公式ホームページ URL	http://www.srcd.org/
開催期間	2009年 4 月 2 日 ～ 2009年 4 月 4 日
旅行期間	2009年 3 月 31 日 ～ 2009年 4 月 6 日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA・Denver, Colorado・Hyatt Regency Denver & Colorado Convention Center アメリカ合衆国・コロラド州デンバー・ハイアットリージェンシーデンバー& コロラドコンベンションセンター
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	鈴木華子 ¹²³ 、アン・パロカリ(Ann M. Polcari) ³ 、マーティン・タイチャー(Martin H. Teicher) ³⁴ ¹ 熊本大学大学院医学教育部 ² (独) 日本学術振興会特別研究員 DC ³ ハーバード大学附属マクリーン病院 ⁴ ハーバード大学医学部精神医学分野 *平成21年4月1日より日本学術振興会特別研究員に採用されたため、鈴木華子の所属が増えましたことを明記いたします。
発表題目 ※正式名と日本語訳	The negative consequences of having little routine and rules at home during childhood on young adults' mental health 小児・児童期の家庭において規則や習慣が少ないことによる青年期のメンタルヘルスへの否定的影響
補助金額	100,000 円 (内訳: 航空券 (成田-デンバー往復) 131,720 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2009年4月2日から2009年4月4日までアメリカ合衆国コロラド州デンバーにおいて開催された Society for Research in Child Development Biennial Meeting（子ども発達研究学会隔年学術集会）に出席するため、申請者は2009年3月31日から6日間に及び渡米し、2009年4月6日に日本へ帰国した。申請者は本学術集会において、The negative consequences of having little routine and rules at home during childhood on young adults' mental health（小児・児童期の家庭において規則や習慣が少ないことによる青年期のメンタルヘルスへの否定的影響）と題されたポスターの発表を4月3日に行った。また、シンポジウム等にも積極的に参加し、他の国で行われている最新の研究や小児発達分野における現在と今後の方向性の情報収集を行い、そして、申請者の学位論文に関連する研究について学んだ。この度補助を受けた10万円は、成田・デンバー間の往復航空券代（131,720円）の一部として当てた。

本研究は、米国マサチューセッツ州に住む18～26歳の男女を対象として、小児期・児童期の家庭における規則・習慣と現在の精神症状・精神的ウェルビーイングの関連を見たものである。規則がほぼ無い家庭で育った人たちの群は決まった規則がある家庭で育った人たちの群と比べて、青年期の不安症状、うつ症状、身体的症状が高く、身体的健康感が低かった。また、家庭における習慣がほぼ無い人たちの群は決まった習慣がある家庭で育った人たちの群と比べて、青年期の不安症状、うつ症状、身体的症状が高く、満足感、身体的健康感、友好感が低かった。その他には、規則が厳しすぎる家庭で育った人たちの群は決まった規則がある家庭で育った人たちの群に比べて身体的健康感が低く、習慣が厳しすぎる家庭で育った人たちの群は決まった習慣がある家庭で育った人たちの群よりも不安症状が高く、満足感が低いことも判明した。この結果から、子どもの家庭においてある程度の決まった規則や習慣を保護者が促すことの重要性が伺える。

本研究のポスター発表においては、多数の研究者や臨床家から有用な意見をいただいた。統計に関しては、全体のサンプル数が1027人と多いため、有意差(p-value)よりも効果サイズ(effect size)を使用したほうがより正確な結果が得られるといったコメントをいただいた。その他には、人種ごとに統計結果を出してみたらどうか、養育スタイルに関する先行研究と本研究はどのような関連性があると考えられるか、子ども時代の規則や習慣を思い出して回答するのは主観的な意見でありどこまで結果の一般性を問えるか、などの助言や質問をいただいた。また、保護者を対象に養育セミナーを開催している人たちからは、「適度な規則や習慣を設けるように」と保護者にいつも話しているが、こういった研究成果はセミナーで使用する事ができ、保護者たちの理解をより促すことができるため助かりますといった奨励の意見も幾度かいただいた。

社会や臨床現場で応用できる研究の重要性というものをいつも感じている。今回の申請者のポスター発表におけるディスカッションや、シンポジウム等への参加における情報収集においても、現場が必要としているものと研究が提供できるものとのギャップを埋めることがいかに大切でかつ難しいかということを感じた。今回、申請者が発表した研究においては、子どもの頃の規則と習慣を「厳しすぎた」「厳しかった」「ある程度決まっていた」「ほぼ無かった」の4つの選択肢から一つを選択するものであった。現段階では、それら個々の選択肢の定義づけがなかったため、漠然とした「子どもの頃のある程度の規則・習慣が後のメンタルヘルスに大切となる」という結果しか提示することができず、「ある程度」がどの程度なのかをはっきりと提示することができなかった。しかしながら、今後、個々の選択肢に定義づけすることによって、家庭で使用する明確な規則や習慣を社会や保護者に提唱していくことができ、研究と現場を繋ぐ架け橋になると考える。日本社会や国際社会の将来に貢献していく上で、申請者の今後の研究の方向性を見出すことができたので、今回の学会参加はとても重要で有意義なものであった。